

いしかり 藩

- いしかり子ども風土記—郷愁の砂浜遊び吉岡 王吉…1
小樽内集落高瀬 たみ…11
石狩の近代化はどのように進められたか君 尹彦…13
石狩花畔土地改良区生振地区について吉田 隆義…20
石狩市八幡町高岡の通称名調べ小川 茂…25
石狩地方史ノート—
樽川の運河・生振の養鶏・八幡の馬市鈴木トミエ…29
遊び心で推論した生振地名考吉野 惣栄…36
養 蜂金子 伸久…43

第 12 号

石 狩 市 郷 土 研 究 会

いしかり子ども風土記一

郷愁の砂浜あそび

吉岡玉吉

私のふるさととは、石狩川河口の砂州の街いしかりである。川と海の幅は五百メートル足らずで、砂丘の陰の生家から海岸まではその半分ほどの距離である。いつも川と海からの風が吹き抜けて砂ほこりが街中を舞い、雪は真横から吹きつけて足をすくませ、顔をそむけさせた。この風のまち、砂のまちのふるさと意識は、少年時代の遊びの場の回想によって一層強まる。海と川、砂丘のハマナスを主とする海浜植物原は、子ども達には格好の遊び場であった。

私の少年時代の昭和初期（一九三〇〜一九四〇）の遊びは素朴で自然のなかに解け込み、自然を活かしたものが多く、それぞれが親から子へと伝えられてきたものと、遊びながら知恵と工夫で作れ出し共感を呼んで広まったものが多かった。単純な遊びでも知的好奇心をはぐくんだものが基礎となる。その意味では子どもは遊びの天才であり発明家である。

そして、遊びの場には子どもの集団があり、集団にはガキ大将がいた。年少者や新加入者はガキ大将の真似と口うつしから学んだ。昔はとにかく真似ることが勉強であり、集団は自身を知る場でもあったと思う。

自然に恵まれた石狩市も、時代が移り都市化が進んできて、自然相手の遊びは危険と禁じられることが多く、少子化によって子ども

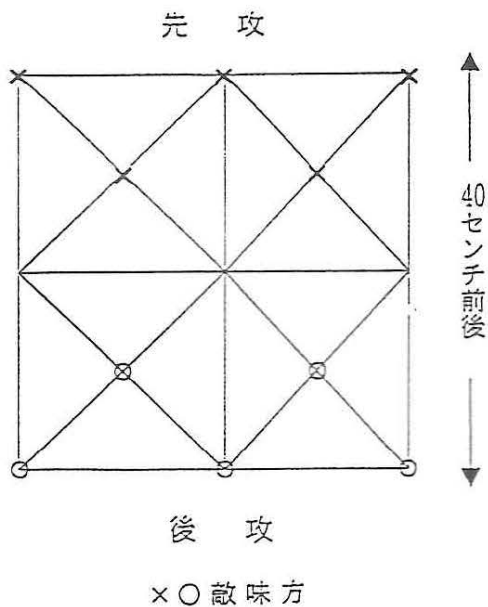
集団もガキ大将もなくなった。幼稚園・学習塾、おけいこ通いと受動的に慣らされ、余暇は個室でのテレビ、ラジオ・ファミコン等で、携帯電話が友達つき合いの仲介というのが多くの子どもの日常生活となっている。

従って、自然を活かし野生味あふれた石狩の子どもの遊びは伝えられず忘れ去った。

石狩市発祥の海と川と風のまちで、祖父から父親、そして古稀をすぎた私に伝えられ創造された砂浜あそびを生活文化遺産として書き残し伝えておきたい。

(一) ハサミ棒取りあそび

夏、海浜の砂上に図のような線を引き、二人で行うゲームであ



る。お互い五本づつ棒(×○敵味方)を立てジャンケンで勝ったものに優先権があり、先攻、後攻を決めてゲーム開始となる。このゲームは後攻の方が有利であるが、時々先攻が勝つ場合もある。最初のジャンケンが勝負の分かれ目であるが動かしかたで先手勝利の場合があった。

この遊びは低学年用のもので泳ぎにあきて砂の上に寝そべりながらよくやった遊びである。

(二) 砂棒倒しあそび

前記同様海水浴期の遊びである。砂で二〇センチ位の小山を作り三〜五人位で遊ぶ。ジャンケンで順番を決め、勝ったものから砂を片手または両手(開始前に片手か両手か決める)で山にした砂をかいて行く、山の頂上に二〇センチ程度の棒を立て砂をかいている時にその棒が倒れたら、その砂をかいた人が負けとなる。勝者に権限があり「あの網干場まで走ってこい」とか「もう一回海に入ってこい」とか様々に言い付けられた。

この遊びも砂の上で寝そべりながらよく遊んだものである。

(三) ブランコあそび

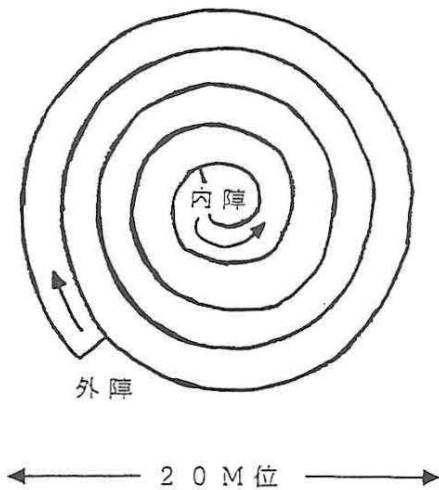
この遊びも海水浴期の遊びである。主として男の子で高学年がよく遊んだものである。海水浴場に高さ四メートル前後のブランコ一柱が設置され海水浴客の遊び道具となっていた。夕方、海水浴客が少なくなつてから多い時は二十人位の子どもから青年まで集まつて

大きく立ち漕ぎしてから飛び降りる。誰が一番距離を出したかを競ったものである。大体、十三メートルから十五メートルを飛び悦に入つたものである。着地は砂の上であるため怪我をするものはなかった。それぞれ飛ぶ距離が決まつており、二センチ、三センチを上下し、その争いに終始した。その二、三センチに誇りをもつて競技したものである。この遊びは度胸があり身軽で運動神経の発達したものが勝利を得たようであった。

(四) ジャンケン陣取り(渦巻き陣取り)

①石を使わず砂地で行つた。相手が柵目の中に入り、ジャンケンで柵目を増して行き、負けたら交代する。勝つたら進み負けたらさがる。最終的には柵目の多い方が勝ち。二人以上何人でも出来、

注 内陣・外人から走り出す。
交わったところでジャンケンする。



比較的低学年でも出来る。海水浴の季節に砂浜でよくやった遊びである。

②外側に出発点と内側の中心部の出発点から用意ドンで走り出し交わったところでジャンケンをする。勝ったものはまた走り進む。負けたものはその場で脱落。待機しているものが進む。最終的には相手共相手の出発点に達したら勝負ありとなる。相手の出発点間近で負けたら味方の出発点から走って行くのが、疲れて大変苦しい戦いになったものである。男女低学年生が入り乱れて行うとき一層面白い競技となった。脱線してすれちがって進路を損したり、様々な展開があった。この遊びは大人数で遊べた。

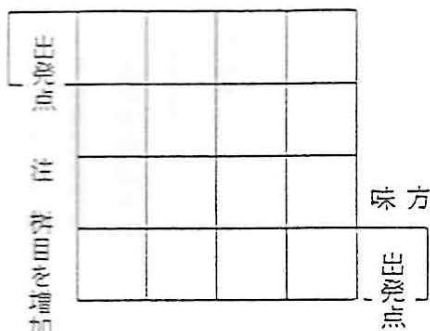
(五) 西洋陣取り

この陣取りは男子に限られている。なかなか勇壮な遊びの一つであって陣取り遊びの中でも一番活発なものであった。二人以上で出来るが十人から二十人位が一番面白く、それだけに闘争意識も強くなる。

特徴としては直接相手にぶつかって行くこともあるが、あながち力の強いものが勝つとは決まっていない。味方の半数が本陣を守り残り半数が攻撃する。その際、線から飛び出したら失格、一応本陣から出発して休憩。地上で敵と出会い小競合いとなり、線から一歩でも足が出ると負け。押し、または引く(本陣の中からも)押されたものまたは引かれたものは負け。互いが進み本陣の入口付近で最高の戦いが展開され、相手陣地内に入り拠点に手または足でタッチ

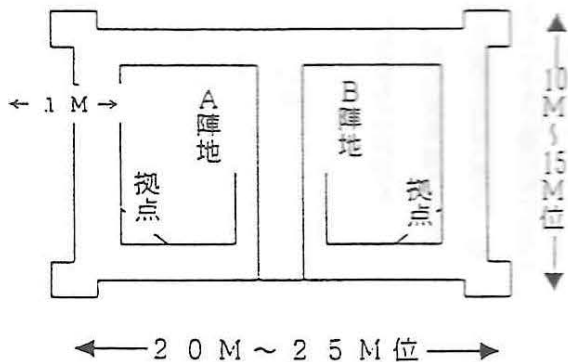
← 10メートル位 →

相手方



注 意 面を增加するに可

注 意 地は避難場所



しても勝負が決まる。この遊びは、闘争心を満喫することが出来るのと集団的に統一を欠いては勝つことが出来ないところにその面白さがあった。

特に、学校での休み時間に屋外運動場の砂地で服が破れるくらいにまで引っぱり合って競技したものである。この陣取りは二人以上なら出来る遊びであるが大勢になるほど面白い。

(六) タスケ

二組に分かれ、それぞれ陣をきめ、陣は主に電柱か立ち木(屋内運動場では木棒の角など)を選定する。この遊びのモットーは敵陣の虚を衝くことにある。

虎視眈々として相手の虚をねらう。陣との距離は五十メートル前後である。この遊びの特徴は、早く陣を離れているものが、後から陣を離れていたものより弱く常に追われるのである。後から陣を出て自分より早く離れている敵を追い詰めてその体に触れる。(タッチすること) 触れた者は、虜(とりこ) となつて敵の陣地に連れて行かれ、助けにこられるまで手をつないで敵陣にいなければならぬ。この虜が四人五人と増えるに従い各自手を長くつないで味方の助けを待つのである。

この味方の虜を助けるためには、敵を捕らえようと追いつがつてくるのを巧みに交わしながら虜になつて味方の一人に触れなければならぬのであるが、なんといつても敵陣のことであり、殊に自分より後に陣を離れてくる敵に対し捕らえる権利がない訳でなか

なか助け出すことが出来ない。どうかするとミイラ取りがミイラになつてしまう場合が多い。もし助け出すことが出来なければ助けた者も一応は自分陣地に帰らなければ敵を攻める権利がない。

こうしたことを何回か繰り返している間に勇敢に敵の隙をに乘じ定められている敵の陣地である電柱なり立ち木などに触れることによつて勝ちとなるのであるが、攻めるものは常に機転が利き、また、足の速いものが選ばれまた、守る者は常にその動作の上に巧みさが必要ならぬ。

人数の多い時には、各陣とも二時間も一勝負にかかることがある。夏から秋にかけて学校の屋外運動場や夕暮れ時街中で二区、四区本町は一區から六區まで区画されており、筆者は三区に在住していた。(子どもらも集まつてよく遊んだものである。

(七) テツバ

ジャンケンして相方に分かれ、遊戯人数は二十から三十人前後が面白い。テツバというのは東北地方の方言(山形、新潟)で「間違つて手をつく、お手付きをする」の意味である。

ルールは自分の利き手(右または左手)で相手の両スネ(左右いずれかでよい)及び背中の中央部をタッチすることによつて、された者が負けとなる。大将または王様を決めるのも面白い。

参加者が一対一でジャンケンして勝ち組みと負け組みに分かれ、樹木(屋内運動場は他に遊んでいるものを樹木のかわりにする)のかげなどに潜伏して相手の不意をつくなどして近づき対戦し、片手で

スネまたは回り込んで背中にタッチする。タッチされた者は負け、戦列から離れる。

大将または王様が負けたら勝ち数が多くてもその組は負け、大将または王様が健在の場合、生き残っている数が多い方が勝ち、二組以上、三組、四組でも牽制し会って面白い。大将または王様になる者は体が大きく敏捷で感がよく、力の強い者が選ばれた。この遊戯は機敏さと感の良さが要求される。高学年になっても面白く遊べた。学校での休み時間、一クラス全員でよく遊んだものである。特に夏休み期間中砂浜で陣一つで駆け回り、海の中にはいつまでタッチするなどして逃げ回ったものである。

(八) ドンドコドン

数の多いほど面白い遊びである。お互いジャンケンして相方に分かれ追い掛け合ってタッチし、その場でジャンケンして勝ったものがのこり、負けた者は脱落する。全部負けたらそのチームは負け、時間を切つてやる場合、負け人数の多い方が負けとなる。

これを陸軍、海軍でやることもある。陸軍の場合、戦車Ⅱグウ、高射砲Ⅱチヨキ、飛行機Ⅱバーとする。海軍の場合、潜水艦Ⅱグウ、駆逐艦Ⅱチヨキ、戦艦Ⅱバー。

(九) パッチ(砂パッチ、金パッチ)

丸や長方形の札、ない時には厚紙で作った。

北海道ではパッチ、東京ではメンコと言っていた。遊び方はみな

同じ。パッチという語源は札を板盤に叩き付けた瞬間パチという音がする所から名付けられていたと言われている。形の小さいものは直径三センチぐらいから、大中小、大きいものでは二十センチ位のものもあった。丸型のボール紙で裏表をつけるため表面に絵模様、薄紙をはってあり、主に武者絵が多く、軍人、偉人、スポーツ選手、マンガの主人公など様々であった。試合前に、ホントコ(本気・真剣)かワサコ(本気でない)かを決める。数が多くともジャンケンで勝ったものが後攻めか先攻めかを決める。

砂パッチⅡ普通は地面、板面で行うが石狩本町は砂地が多く砂の上で遊ぶことが多かった。上手なものは何十枚もホントコで勝ち小型のみかん箱一ぱいも持っている子どももいた。学校では上級生と下級生でやる時はワサコの方が多かったがそれでも下級生の上手なものは上級生にホントコで挑戦した。(学校からはホントコでやらないように言われていた。)

金パッチⅡ要領は前者と同じであるが、ノリのフタや金属製のフタにパッチを入れ縁をつぶして使用、中にはそのなかに鉛を平らにして入れたものもあった。砂パッチにこれを使用すると普通のパッチでは勝つことが出来ないので禁止することもあった。従つて、金パッチ同志で勝負することになるが砂の中にもぐり込んで姿が見えないままぶつけ合つて勝負した。勝負がついているかどうか砂をそうつと払いのけてその状態を見て勝っている負けていると争つたものである。

(十) 競馬虫取り(競馬虫の競争)

七月上旬から砂丘やハマナスの木陰などの砂の中に生息する体長、大きいもので二センチ前後の走るのが早く体色黒、足に白線の模様があり、さながら競走馬のような所から競馬虫と呼ばれていた。昆虫であるが名前は不明。

砂地に十センチくらいの溝を作り(子どもの尻で引つ張って作った。)子供達がそれぞれ捕らえてきた虫の馬主(虫主)になって出発点にならべ、細い棒で前方を指差して走らせ一番早く終点に着いたのが勝ちとなる。

虫があつちいつたり、逆もどりしたりさまざま動きをする。それを棒で方向付けするところに面白さがあつた。優勝した虫は家に連れ帰り水を与えたりスイカやキュウリをやつたりして育て、また次の日のレースに出場させるなど楽しみながら遊んだ。今も砂丘にこの虫達の末裔がいるのだろうか。

(十一) 水泳

夏休み期間中の楽しみで年中で一番の悔いのない遊びの一つであつた。夏休み中、二週間くらいの予定で水府流打田派による水泳講習会(石狩水泳部)が開催される。水泳部に参加できない子供らは講習会を見よう見まねで潜水法、泳法を習得したものである。泳法は、両輪押し、大抜き手、早抜き手、小抜き手、一重熨斗(本体、略体)二重熨斗(本体、略体)片手抜き手、前鴨、後ろ鴨、水中羽交押し、飛び込み、遠泳などがあり講習会が終わつた後も勝手気ままに朝から

晩まで泳いだものである。

とにかく七月半ばになると、天気の良い日は朝からでも海に入る。今でも石狩浜は子ども達にとって最大の遊び場であり、夏休みは一ヶ月とやることであるがその期間の短いこと。だから石狩の子供達は水泳部に入らなくても、海が時化ると川に来て泳ぎ、小学校四・五年生で石狩川を横断したり、往復したりすることが出来るようになっていた。(石狩川最短のところで二百五十メートル位)。

(十二) クロンボゴッコ

泳ぐのにあきてくると海から上がると、体が乾かないうちに砂に顔をつけると同時に体全体を砂の上に転がり、あらかじめ用意したテンキグサ(ハマニンニク)を禪の間に挟み(十数本)、頭部にこれを編んだものを締め「色は黒いが南洋じゃ美人」と歌いながら走り回つた。顔に砂をつけると別人のような顔になり毎日のようにクロンボゴッコして遊んだものである。

(十三) テント生活

正規のテントを使用するものでなく、魚粕等を乾燥するためのムシロを持ち寄つて、三、四人一組になって砂丘の窪地に棒を組み、ムシロをはつて小屋作りをして宿泊するもので夏の遊びの楽しみの一つであつた。家では外泊することは許されなかつたが夏休み中のテント生活をするると申し出ると二、三日の外泊は許してくれたものである。砂の上にムシロを敷いて寝るのだが、砂はやわいようであ

るが長時間寝ると板の上に寝ているようで身体が痛いものである。それでも体験することに意義があるということで夏休みの行事として楽しく過ごしたものである。

(十四) クルミころがし、ドングリころがし(クルミ出し、ドングリ出し)

子供達にとつてはどんな物でも遊びの友となるものである。特にクルミは浜辺に行き渚を歩きながら(注、海辺に流れ着いたものを拾い集めて歩くことを「浜めぐり」といつていた。)皮のかぶったもの、皮のむけたもの。時には一キロくらいの渚に何百個も寄り着いてみかん箱一杯も拾うことが出来た。

四、五人の子供らが競争して拾い集め歓声をあげたものである。川や渚で拾ったクルミ、若生から取ってきたクルミ、また、柏木原から取ってきたドングリを砂丘に行き尻をつかつて(注、一人が友達のを引き尻で二十メートルくらいのみそを作る。)ころがし場を作つてホントコかワサコかを決め、三、四人でいっしょにクルミ、ドングリをころがす。一番先に終点の穴に入ったものが勝ち、ホントコでは負けたものは勝者にとられてしまう。

単純であるが低学年生ではクルミやドングリの転がる状態に変化が合つて楽しい競技であつた。

次にクルミ出し、ドングリ出し遊びである。

二人以上五人位まで出来る遊びで、四十センチ位の円形に高さ十センチ前後のまんじゅう形の砂山にクルミなり、ドングリを叩き込

んでおききつた順番から自分のクルミまたはドングリをぶつつけはじき出す。

いきおい余つて自分のクルミまたはドングリが砂山から出たらファール、勝負無し。自分のクルミが砂山にのこり相手のものが砂山から出たら出されたクルミの所有者は負けになる。(注、競技に入る前にホントコかワサコを決める。)

出せなければ、そのまま砂山に置き、次のものにまわす。この遊びは上手なものは沢山取れてミカン箱一箱も二箱も取つた。クルミまたはドングリの大小、力の出し方などによつて勝負の強弱があり、また、多少の技術も支配され射幸心をそそり真剣な眼差しで競技しパツととともに面白い遊びであつた。

クルミ出しはドングリ出しより面白く数多く取つたものが自慢したもので、秋から晩秋にかけ雪の降る頃までの楽しみな遊びの一つであつた。この頃になると学校から帰ると宿題は後で、とポケット一杯クルミやドングリを詰め込んでそそくさと遠征したものである。

(十五) 小魚すくい、砂エビすくい、イサダすくい。

夏休みの海水浴も半ばを過ぎ、海辺に人が余り行かなくなつた頃、砂エビやカレイの子、フグの子、イサダの子などの小魚すくいもまた楽しい遊びの一つであつた。

渚のイサダすくいは日本手ぬぐいの両はじを二人でもち渚の波が引くのを見計らつてすくい上げる。十数匹のイサダが一遍に入る。用意した、ブリキ缶に入れそのイサダの泳ぐ様子を観察する。

イサダは浮遊性の甲殻類でニシンなど回遊魚のえさになる。最近はずか、ワカサギ等の釣りの撒き餌としてすくわれている。

砂エビも同様にまたはたも網を使用してすくい、男の子はたき火して砂エビを焼いて食べた。焼くと赤くなり食べるとバリバリして味も良く美味、カルシウムも豊富である。(注、当時も小学生のたき火は禁止されていた。成人同伴は可)

カレイの子やフグの子は観察して放してやった。フグの子は渚の砂、波打ち際の砂の中におり、波の出入りに砂の中から出てまたすぐに砂の中に潜る。すくいあげると二センチ位の体長でも一人前に腹を膨らませる。フグの産卵は夜中一回で終了、採卵してから一週間程度で稚魚(仔魚)になり長く渚に滞留しないためいつでも見ることが出来ない。経験では八月上旬、二回程度であった。

(十六) ハマグリ(コタマガイ・イシカリハマグリ) 取り

ハマグリ採取も夏休み中の行動の一つである。西浜(石狩海水浴場)から西方向四キロの海浜、現新港北側の地点付近に鮭定置網の番屋があった。)に男女十人前後の子供らの一団がおにぎりを作ってもらって午前十時頃から海辺をハダシで歩き遠浅の渚をへソ位までの水深のところを足で探り、さわった感触で貝であることを確認して採取、二時間くらいで一人百から百五十個前後を収穫することが出来た。これもまた、誰が一番取ったか競い合って、それを自慢して騒ぎ自宅に持ちかえって味噌汁の材料として食べた。

採集は足の裏に貝が触った感触でその大小を見極め、その大きさ

によって優越感を競ったものである。

普通のウバ貝(ホッキ)も数は少なくないが水深一メートル前後のところにおり、手づかみでできたほどである。このはまぐり取りも石狩浜ならではの風物詩の一つであった。現在では、岸寄りしているホッキガイはないが、新港北側から番屋の湯下付近までの水深三十から五十センチの渚にこのハマグリが生息していて海水浴客の遊びの楽しみの一つとなっている。

(十七) 山グモ取り(戦うクモ)

八月下旬の西風が吹き始める頃、野面に体色が海老茶色、足に白線が入った体長、大きいもので三センチ前後のクモを捕らえてきて二匹をけんかせた。かまれたら毒性はないが非常に痛かった記憶がある。

棒の先にクモを乗せ相方ににらみ合わせるようにして、向かい合せお互い相手を落とすか又は相手を後ろ向きにさせる。逃げ出した方が負けとなる。

クモの名前は不明であったが、子供達の間では、けんかグモと言っていた。当時は、小学校の裏山(現番屋の湯)から八幡神社の砂丘(ハマナスの丘)付近の草むらにたくさん、巣を張り生息していた。この遊びの他、その巣を木のまたに張ってトンボ捕りもした。今はどうか。

(十八) ボウフ摘み(早春)

五月上旬から中旬にかけて石狩灯台したから西浜海岸(現新港)付近までの延長約七、八キロの間、うららかにアイの風(春夏正午頃から、柔らかく吹く北よりの風)が吹いてくるひるさがり街の人は陽光に誘われて「ボフはでたろうか」(石狩方言ではボフという)と期待して小型シャベルや小刀を用意し、手かごをぶら下げてボウフ摘みに出かける。子供らも負けじと陽炎にさそわれて、友達を誘って砂丘に足を運ぶ。なれてくると大人よりずっと見極めが上手で砂の中からわずかに芽を出している若芽を見つけ白い部分の多いボウフを摘みとる。風下のよどんだ砂がふあつと積もったところの芽はなかなか見つけ出すのが困難であるが、子供達付上手にその根株をさがしだす。

ボウフは葉部より砂の中にある茎部が美味である。子供らは一時間位で小手籠に一杯に取って意気揚々として引き揚げる。小学生でも高学年になると毎年どの付近に良いボウフが育っているかよく知っている。

これも石狩浜で育った親から子へ、子から孫へと受け継がれた生活の知恵である。うららかな早春のひるさがり春の味をもとめて三々五々海浜を行きかよう。このボウフ摘みは当時の石狩浜の風物詩として多くの人々に人気があったが、昨今では乱獲で生育も減少したため、ビジターセンターから河口までは海浜植物の一つとして保護されている。

(十九) ハマナス摘みー花摘み

六月中旬になると一斉に開花し砂丘はハマナスの香がそよ風とともに市街地まで流れ初夏の石狩浜の風物詩となる。昭和二十年前後香水の原料として開花直前の花を小学生や主婦の手で摘んだことがある。集められた花はドラム缶につめられ札幌の会社に出荷したようだ。

また、このころはハマナスクリームとして市販されていた記憶はある。男の子でも砂丘からハマナスの咲いた枝を摘んで見て花瓶に挿して香りとその可憐さを楽しむ者もあった。

なお、ハマナスの花が咲く頃の石狩浜は魚介類(マス、イワシ、カレイ類等)も豊富でサケ漁期につく活気に満ちた季節であった。

実摘み

海水浴の季節もすぎ九月の中旬ころになると、浜辺の人影もたえ夏のにぎわいをなつかしむころとなる。砂丘に咲き誇ったハマナスも実が真っ赤に熟し、子供らを誘う。当時、大人は余り見向きもしなかった。

しかし子供らは手かごを持って西浜方面に摘みに行った。上の皮と若干肉身のある部分を歯でむき食べた。ハマナスの種は薄毛のようなものが生えていて首などのやわらかいところにつくとチカチカして気持ちが悪かった。実は甘酸っぱい味がして(イチゴとリンゴを混ぜたような味)初秋を感じる味がした。秋の山ブドウ狩りを共に楽しい初秋の行楽のひとつであった。

ハマナスの海水漬け

大人が作ったものではない。八月の下旬になるとハマナスの実がやや熟し加減となり海で泳いだ後、「水泳の歌」を歌いながらハマナスの実を摘み渚でその実を二つに割って夕ネを出し、渚の砂を掘って埋め小一時間位して取り出して食べる。甘酸っぱい味を海水の塩味がマツチしてほどよい果物の味となつて忘れられない味となつていた。

小樽内川集落

高瀬 たみ

新川（人工河川）は、明治に掘られ戦後に改修、昭和三十八年に今のようにまっすぐになりました。そして、石狩市と小樽市の旧境界線（新港建設のため昭和五十年境界変更）となる小樽内川と合流し石狩湾に注いでいます。

その小樽内川の右岸（海に向かって右）にあった小樽内川部落の歴史は古く、今から約三百年前、松前藩が幕府に提出した「元禄郷帳」「元禄御絵図」のなかに「おたるない」の場所が記載され、当時アイヌの集落があつて漁を営んでいた事が示されています。

「甲辰御收納取立目録」によると十八世紀末に場所請負制度（松前藩が家臣や商人から税金をとつて交易を請け負わす）がおかれ、大和屋、阿部屋とつづき、三人目の恵比寿屋（岡田家）が一八〇七年本格的な経営にのりだす過程で、オタルナイのアイヌたちと一緒に場所も今の小樽市（クツタルシ、入船川付近）に移しました。それが、地名小樽の由来となります。

アイヌ語で、オタ・ル・ナイ「砂・路・川」、オタ・ナイ「砂・川」（山田秀三著「アイヌ語地名の研究」と色々ありますが、土地の人々は「オタネ浜」、「小樽内川部落」、「オタネイ」と呼び親しんできました。

明治時代に、オタネ浜に移住して三代目にあたる林栄信氏は、花畔北三線の漁民団地で、小樽内川部落が最も賑わっていた、大正末く昭和初期頃の漁様子を下記のように語っています。

昔の浜はね、魚はなんでもよく捕れましたね。

オタネ浜の漁民の一部は、石狩と小樽の両漁業組合に加入してましてね。三々四月の春はニシンで、ハリウスの一番深い岩場の所に卵を産みに来る、その大群に網をかけるんだから網がみえなくなる程かかったね。四月く五月より、ホッケ、イワシ、ヒラメ、ソイ、ホッキ貝なんでも山（大漁）だった。ヒラメは、一メートル以上もあるのが沢山かかり、あまり大きいのでタタミと呼んでいました。イワシは、生きのいいうちに茹でて煮干しにして農家や問屋に売ったり、残り（魚粕（肥料））にし、油は石鹼の材料になるのでドラム缶に入れ会社に売りました。

七月になるとサバが山になってかかり、大正十年代には、一回の引き網で一万本も捕れ、一日に二万本の水揚げがありました。農家の馬車を頼んで、二条市場や銭函の罐詰工場に出荷余ったのはホッケやイワシと同じく、煮てから型に入れ搾って魚粕にしました。

ハリウス、朝里、銭函の磯部で遊んでいる丸鰯（まるいわし）とかニシンの子を餌にサバやホッケが集まってくるんですよ。なにせ、毎日どんどん捕れる魚を、新鮮なうちに処

理しなければならぬから、朝の暗いうちから働いて昼夜の別なく働いたものです。

かっぱとかゴム長になってない時代だもの、どっぷり濡れてたいへんだった。母親達は、着物の裾をあげ、おこしまで濡れながら働いていました。かわいそうだったです。そして、八月からは鮭漁。今は十月で止めるけど、当時は十二月の暮れまでやっていました。

漁は星と手稲山が目印で、もや（霧）がかかった時は感が頼りでしたね。サバの大漁は大正末頃まで。ニシン、マスは、昭和二十五年頃まで捕れてましたが、今では幻の魚になってしまいました。サバは、買って食べています。景気の良かったあの頃の浜は、三十戸の家があり、若い衆を雇い賑やかだったですよ。

遊びに行くといったら銭函で、電灯の無い頃だったから狐が恐かったです。（その辺りは、明治始め頃まで狼が出没、同三十二年には花畔で最後の熊が撃ちとられている）

それが、新川から流れる汚水で海が汚れたり、魚を捕り過ぎたりで昭和二十八年頃からとれなくなりました。そこで、やむなく漁業を小さくして、牛や豚を飼ったり、米やスイカもつくり、働いて働きました。

そして、石狩湾新港の開発地域になって移転。

昭和四十八年には、樽川の人達に手伝ってもらってオタネ浜神社をかたづけ、手稲神社にお願いした時は七軒になって

いた。学校（樽川小中学校）は無くなるし、せっかく運動し入れてバスは無くなるので、あの頃は寂しかったです。

新港の中に漁港をつくってもらって、ありがたいことです。が、一所懸命に守ってきたオタネ浜が懐かしいです。

あれから四半世紀が過ぎ、近くにあるオタネ浜は、新港建設の際、道・小樽市・石狩市の三者共同管理とすることに伴い、港湾の地先水面を小樽市の行政区域にする必要が生じ、昭和五十年に樽川村の一部（オタネ浜と十線浜）を小樽市に編入した地域で、今は石狩市ではありません。

現在、昭和三十七年に開通した小樽内橋（石狩側が木造、小樽側がコンクリート）と、かつて小樽内川部落にあった地点に、「オタナイ発祥之地」の石碑が、かつて漁村があったことを語っています。また、蛇行しながら流れていた小樽内川の古い川跡が、部落と前浜の間に沼となって砂浜に残されています。

石狩の近代化は

どのように進められたか

君 尹彦

一 テーマと研究史

石狩市郷土研究会の新年会に参加し、お誘いを受けたのをいい機会に今日お話をさせて頂こうとお邪魔しました。

今日、お話すテーマは単に石狩市の問題だけでなく、北海道がどのように近代化の夜明けを迎えたか、新しい時代を開いていったのか、という課題にかかわります。その中で石狩市が果たさなければならなかった役割はどのようなことだったのか、それを考えてみたいと思います。普通は明治になって近代化が始まるといわれます。勿論、それはまちがいはありません。幕府が倒れて新しい中央集権の国家が出来るわけですから、支配体制の上で間違いのないことです。しかし、明治になって急に近代的になるわけでは有りません。実際は社会の基盤が徐々に変わってきたわけで、その先駆けで最も基本的な制度改革の一つが「石狩改革」だったわけです。日本の近代化はどこから始まるのか、なぜ封建制度が崩壊するのかを知るためにも石狩改革を調べることが非常に大事だと思う。そうした研究の中で石狩市のこの時代をおさえることが大切になってきます。

私は、十年ほど前このテーマを「近代日本と北海道の研究」という場で話をしましたが、それと前後して北大の麓さんが、この問題に着目して研究を手がけていました。私より若い人ですが、当時は

まだそのことを私は知りませんでした。そのあと筑波大学の学生が卒業論文にこのテーマを取上げたり、最近いろいろなところで見直されるようになってきています。

明治三十年前後にこのテーマについて非常に関心が高まって、とくに永田方正というアイヌ語の地名を研究した方が着目しました。それをうけて札幌の伊東正三という新聞記者上がりの人が、二、三年で千頁以上の『札幌区史』をつくりあげましたが、その中で石狩改革が非常に重要だ、石狩・札幌の問題だけでなく北海道を語る上できちんとおさえなければならぬということを力説されて、その本の中に章を設けて書いたのです。ですから私たちが今になってこのテーマを急に取上げたということでは決してありません。

ところが大正に入ると、このテーマはなぜか忘れ去られてしまうのです。どうしてそのようになったのかを考えてみると、それは石狩改革の本質をどのように理解するか、とらえるかという立場の変化にほかなりません。すなわちその本質を、この場所を請負っていた阿部屋（村山）をやめさせるんだということにしばってしまっただ。それが大正から昭和にかけての問題意識のずれたったと思う。石狩改革の総体を見ないで、その一部を見るようになったところに大きなつまずきがあるのではないか、そんなことを反省しています。

最近近代史をやっている人も、江戸時代、幕末をやっている人も、この問題に大きな関心をはらっています。まだ解決しなければならぬ問題は沢山ある。むしろ課題ばかりが多いと思う。この機会に、石狩市でこのテーマを掘り下げるといふか、発展させると

どうか、そんなきつかけになればありがたいと思います。

二直捌ぎの意味

その前から石狩改革は重要なんだと松浦武四郎は言っています。松浦武四郎は北海道中を自分の足で調べてた人で、この人が改革を幕府にけしかけてやらせるんです。そして北海道の歴史年表を作つて、このことを記録していますが、言葉に曖昧なところがあつて混乱のもとになっています。

松前藩というのは、道南の一角にあつて、あとは石狩を含めて蝦夷地です。蝦夷地というのは日本の国であつて日本の国でないのです。それを領地であるかのごとく松前藩は支配している。日本の国というのは渡島半島の松前のところ、あの一角だけが松前藩といつて藩幕国家の領土なわけですから、国内でない蝦夷地をどうやつて支配していくかが問題になります。松前藩はそれを交易を名目にして商人にやらせたのです。それが場所請負制度です。商人でありながら場所には入れば藩の役人と同じ、あるいはそれ以上の権威を持つてアイヌを実際に支配し、その土地を経営するわけです。幕府や藩が直接手出し出来ないことを商人にやらせて蝦夷地を支配する、それが連綿として二百四十年間続いてきたわけです。

ところが嘉永七年、日本はロシアと和親条約を結び、北海道全島と千島の国後・択捉両島は日本領土であると明示しました。樺太はこれまでの仕切りのままと決まつたのです。

そこで従来のような商人にまかせつきりの支配のやり方ではすまな

くなり、蝦夷地を幕府が直轄し、その一部を直接支配し、しかも仕切りのままと決まつた樺太対策に、裏の手を使って日本勢力の扶植に苦勞するわけです。その一方策が直捌ぎというものでした。もうひとつ、まぎらわしい方策に「直場所」というのがある。後になつて幕府は、「石狩は「直捌ぎ」にしただけで「直場所」にはしていないという。何故かというところの二つは、同じようであっても実質は違う。一定の地域が「村並」にならない場合は「直場所」ではないという見解がでてきて、幕府自身も区別しようということになった。幕末に「村並」になると日本の中の領土に準じるということでも国が直接管轄するところとなる。場所請負人をやめさせるだけでなく、村役人がそこにおいて住んでいる人の戸籍を作り、人別帳に入れる。人別帳に入った人から税金をとる。こうして土地も人民も直接幕府が支配することになります。蝦夷地のうちでも道南の六場所については「村同然」の扱いをしました。八雲から長万部にかけても、村ではないけれども村と同等に扱います。八雲から長万部にかけても、村ではないけれども「村並」にした。そして、その隣りの石狩については「村並」ではない、直場所でもない。従つて「直捌ぎ」だといふのです。ところが松浦武四郎は、これについてかなり反発しています。自分で作つた歴史年表には石狩を直場所にしたと書いてあります。直場所にしたのは俺なんだとかなり自負があつたんだと思つて。

場所請負人をやめさせられた阿部屋（村山家）でも明治十年代にこのいきさつをまとめています。改革にあつた本人にしても、や

めさせられた村山家にしても、石狩改革が歴史的に大きな事件だったという意識を持っていたと思う。それを歴史の流れの中に位置づけ評価したのが明治三十年代から四十年代にかけてのことだったわけです。

三改革の原因と内容

ところが石狩改革という用語の使い方が曖昧というか、どんな場合に石狩改革と使ったらいいのか、これまで定義づけをしてこなかったことが混乱を招いていると思う。それで私なりにこういふふうはこの用語を使おうと決めています。石狩改革を狭くとらえれば場所請負人を罷免して直接幕府が石狩で事業をやる、すなわち直捌きに変わったという一行ですみますが、広く解釈すれば当時の社会全般にかかわってきます。

場所請負制というのは支配体制そのもので、単なる漁業の営業権ではない。地域の全体、今でいえば行政あり、福祉ありの制度全般をひつくるめた制度です。それをやめて新しい制度に変えることを石狩改革と呼べば、安政五年から同六年・七年のこの時期の石狩場所のことは全部、石狩改革の内容に含めなければならぬ。そうすると、幕末の歴史そのものが全部石狩改革の研究の範囲だということになる。それではかえってとらえどころがなくなり何が問題だったのかピンボケしてくる。そこで、石狩改革というものはこの範囲の事をいうのだという定義づけが必要だろうと思うのです。そこでプリント①の「蝦夷地御開拓諸取扱向手続荒増申上候書付」の中で

使われている石狩改革という内容に限って、この用語を当てはめたら良いと私は考えています。これは有名な資料で、幕末蝦夷地をどのようにしていくか安政元年から調査を行い直轄して実施した事業を文久二年幕府がまとめたものです。その中に石狩改革ということが幕府にとって重要な事業だと評価した文章が含まれています。この『書き付け』はいろんな人が書き写して写本がたくさん残っていますが、ここで使用したのは、函館市立図書館にある最後の箱館奉行をやりました杉浦誠という名奉行が手控えとして持っていたものです。

あらましを簡単に説明しましょう。

「一 西蝦夷地石狩の儀は、私領中より引き続き松前河原町家持ち阿部屋伝次郎え受負申付、運上金千両、別段上納金貳百七拾壹両、都合千貳百七拾壹両、壹カ年の御収納高に有之候処」

西蝦夷地にある石狩場所は、松前藩が支配してきた時代より引き続き、松前城下の河原町に住む家持ち阿部屋伝次郎に請負を申し付けてきました。村山家は松前藩から苗字帯刀を許されましたから苗字を使っていました。幕府は認めていない。この文書は幕府側で書いていますから苗字を使っていません。一年間の運上金は千両で、そのほか別段の上納金が貳百七拾壹両あるから合計千貳百七拾壹両を毎年幕府に納めさせています。運上金というのは正規に決めた営業税、それに上納金というのは更に余分に取られる寄付金みたいなもので、実際にはこの他にいろんな金を請負人は松前藩に納めさせられるんです。松前藩は年々千貳百七拾壹両を税金として受け取

つていたので、その後を引き継いだ幕府もそのまま同金額を納めさせていたというのです。

その次に、なぜこの石狩改革をやったかという三つの理由が書いてある。

「右伝次郎儀、追々身上向不手廻相成、場所世話方も不行届、土人撫育筋等懈怠致し、剩私曲の儀不少趣相聞候に付」と。

一つ目は身上向きの手が回らなくなってきたからだというのです。場所請負の経営がゆるくなつたというのでしよう。二つ目は場所の世話方がいきとどいていないからだという。石狩場所を請負うときにいろいろな義務を負わされます。あなたは、ここを請負ってほしいのだけれど、こういう事だけは守ってくださいと決めていることを守っていない。たとえば旅行者の世話をしたり、道路をととのえたりすることです。三つ目は土人の撫育、すなわち石狩に住んでいるアイヌの世話を怠けていないということです。これも場所を請負う条件です。あまつさえ公正を欠いて勝手気ままなことはかりしているから場所請負人をやめさせたいというわけです。

さらに石狩改革にいたる手続きが述べられています。

「安政四年巳年中、織部正淡路守廻浦序、実地見聞致し候処、難捨置品も有之」

安政四年、石狩改革が安政五年ですからその前年に、箱館奉行である堀織部正と村垣淡路守が廻浦すなわち、蝦夷地を視察して回つた折、石狩にわざわざ行って実地見聞をした。

そこで捨ておきがたき実態を確認した。さきの三つの状態をとて

見過ごすことはできないと判断したわけです。

この他にこんな事を言っています。「殊に同所の儀は東西通路も有之、蝦夷地第一の地勢にて、抑厚き見込みも有之」

石狩場所は東の太平洋側と西の日本海側を結ぶ交通の拠点にあたる重要な位置にあり、石狩平野は蝦夷地の中で第一の地勢だ。次が非常に問題のある文章なんです。この石狩場所は厚き見込みのある土地だと。それでは、どんな見込みのある土地なのか説明はしていません。みんなこのようにお茶を濁した言い方をするんです。言葉に表して言うことが、このまま出来ないほど重要な意味がある。石狩改革をする最大の理由はこれなんだということです。すなわち、これほど重要な場所の請負人が三点もの欠点を持っている。だから止めさせなければならなくなったということです。

「傍衆評の上改革仕、同五年年中、右伝次郎は受負取放、運上金御免、漁業稼方のみ申付置、一と場所渡し、年々漁業出高の凡壹割五分以上納為致、惣て御直捌の積評決仕」

請負人が不的確ならば別の商人をもつて変えるのが通例です。しかし石狩場所は公認の商人をえらばず。請負制そのものを廃止してしまつたのです。そして直捌制を導入しました。

ここに幕府の意図があつたわけです。

その後どんなことをしたかというところ、漁業取締り人を住ませアイヌの漁業を掌握し出稼ぎ人を沢山入れ漁場を与えて漁業を盛んにしました。すると、一年間に二千五百両も税金が入ってきた。請負いにしていたときは千式百七拾壹両しか入らなかつたのに、出稼ぎ

人にやらせてみたら二千五百両も入ってきた。大変儲けになる、おおいに喜ばしいことである、と幕府は自画自賛しているんです。そしてその石狩で儲けた金は当面は蝦夷地の開拓に使うけれども、ゆくゆくは江戸に持って行って幕府財政の窮乏を救うために使うんだと言っている。しかし、今は蝦夷地に金がかかるので使わしてほしいと言わなければならない。

なぜ、この『書付』にある石狩改革が北海道の歴史の中で中途半端に扱われてきたのかというと、それには理由があります。そもそも『書付』の本文には必ず何通かの付属の文書がそえられているんです。箱館奉行がきめたことや老中に伺い出て決裁をとった書類を本文に付けて一冊の本になっているのです。ところが不思議なことに石狩改革の文書だけ決裁の付属文書がないのです。それが今まで北海道でこの問題がきちんと取り扱われなかった一つの理由だと思います。なぜ、これに付属文書がないのか不思議です。本文を読めば、そんな伺いを老中にささなくてもいいから改革をしなさいという許可を事前に得ていたから、そういう文書は作られなかったともかんがえられます。ところがやはり正規の手続きが取られ文書が作られていたことが判明しました。それは村山家の資料が開拓記念館に寄贈され、その中に写しが残っていたからです。

それがプリント②の文章です。箱館の三人の奉行がきちんと協議して、老中まであげてちゃんと決裁をとっているのです。そこで①の本文と②の文書を比べてみると、それに矛盾はありません。ただ計画段階と実行段階で差が生じています。あくまでも計画段階の決

裁文書です。実際は、こういうふうになりましたというのが①の報告です。その違いがあるわけです。

例えば、税金を一割五分取りましようという計画しました。出稼ぎ人を石狩に連れてきて鮭を捕らせ、十五%の鮭を現金で納めなさいと。ところが実際は花畔漁場で三十%という効率でした。日本海側の場所請負制度のもとで、出稼ぎ人は二八(にはち)取りといって二十%を請負人に納め、後の八十%は自分のものになるのが普通です。

ところが、石狩場所では、浜からそのテルメのところまでが三十%の税金、テルメのところから私の勤める大学のところまでが二十%の税金、それより上の江別あたりまでいくと十五%の税金だった。計画には一割五分と書いてあっても実際にはそんな安いものではなかったのです。従って、①の実施報告書には一割五分【以上】と書いてあるわけです。そんなふうにして石狩改革を断行していたということなんです。実際やったことを見ると幕府は、やはり財政危機を救うために、この石狩に目をつけたんだと、いうふうに見ていいのではないかと思う。なぜ、商人を雇い漁業公社みたいなものを作ってまで幕府自ら漁業経営にあたったかという事です。そこまでして金を工面し、その金を内々に樺太開発につき込んだのです。そこで一応①に書いてある内容に限って石狩改革の範囲だと押さえていきたいと思えます。

さきに紹介をしましたように村山家で保存してきた資料が開拓記念館に寄贈されました。その中に石狩改革の一件を村山家としてまとめて整理した綴りが残っていました。中でも貴重なのは石狩改革

前後の村山家の勘定目録です。今でいえば一年ごとの決算報告みたいなもので、実際にどのようなようにして村山家が請負場所を経営していたのか全体を経理面から見る事ができます。これは非常にありがたい史料です。

この他に北大に村山家の資料が千五百点くらい保存されています。石狩の長谷川嗣先生が何年もかかってボランティアで毎日、交通費も自費でこれを整理され目録をさくせいされました。これらの史料が使えるようになり石狩改革の全容を知ることが可能になったのです。

①『蝦夷地御開拓諸取扱向手続荒増申上候書付』

一西蝦夷地石狩の儀は、私領中より引統松前河原町家持伝次郎え受負申付、運上金千両、別段上納金貳百七拾壹両、都合千貳百七拾壹両、壹ヶ年の御取納高に有之候処、右伝次郎儀、追々身上向不手廻相成、場所世話方も不行届、土人撫育筋等懈怠致し、剩私曲の儀不
少趣相聞候に付、

安政四巳年中、織部正淡路守廻浦序、実地見分致候の処、難捨置品も有之、殊に同所の儀は東西通路も有之、蝦夷地第一の地勢にて、抑厚き見込も有之、旁衆評の上改革仕、同五年年中、右伝次郎は受負取放、運上金差免、漁業稼方而已申付置、一と場所割渡し、年々漁業出高の凡疋割五分以上納為致、惣て御直捌の積評決仕、其余川々有来漁場并新規取開の場所は、兼々漁業筋内願罷在候ものの中に、身元人物共相撰、前書伝次郎同様出稼申付候積取極、其段、同

年四月中申上置、夫々手配仕。

漁場取締改等の儀は、其筋事馴候ものの内、人物相撰、雇足輕申渡、万端取扱方為致候処、追々出稼人相増、都合貳拾人余に相成、夫々漁場割渡し、場所詰め支配向の者厚世話仕候処、改革初年午年の儀は格外出荷物有之、凡貳千五百兩余の御取納高に有之、前書伝次郎受負中の高に見合候得は、一倍余の御益に相成候に付、右貳千五百兩を目高に仕、漁業出精為仕候。且同所の儀は、前文申上候通、兼々深見込も御座候場所に付、御直捌に仕、都て私領中の悪弊一洗いたし、漁業のみに無之、開拓筋世話仕、在住の者并農夫等引移、畑地取開、市店をも為取建、諸商売等為營候に付、永住人数も相増候儀有之。

尤右様諸事改革、新規御直場所に仕法取建候に付ては、当分の所、無余儀御入費の廉も有之候に付、右御取納の内、直に開拓入用の方え繰廻し、取賄置、追々御取納を以、繰戻し候積に有之、且漁事の儀は年々不同にて見留も附兼、永久御損益の程は暁と難差定候得共、猶此後追々漁場取開、出荷物相増、御取納高相進候様仕度、精々手配罷在候の儀に御座候。

(市立函館図書館所蔵杉浦誠旧蔵本による。かな字はひらかなに統一し改行等を編者がほどこした。)

②西地石狩場所改革仕候儀申上候書付

竹内下野守

堀織部守
(トヤ)

村亘淡路守

西地石狩之儀者打開候場所二而通路も有之蝦夷第一之地勢二而兼々厚き見込も有之候処松前伊豆守領分松前河原町阿部屋伝二郎儀年来同所請負致来候処近来身上向不手廻相成場所世話方不行届支配人番人抔唱へ候者江一向為打任置候二付土人撫育筋等江心を用ひ候者更ニ無之唯々利慾ニ走り種々私曲之儀不少織部正淡路守同所逗留中実地見聞いたし難捨置品も有之夫々沙汰致候儀も御座候得共何分差逼兼悪習一洗致し候期無之候ニ付右等衆評之上此度改革仕右請負人伝二郎儀請負取放し是迨之運上金差免し漁業稼方者是迨之通申付一場所割渡し年々漁業出高之凡忒割五分上納致させ其余中川上川枝川筋有来漁場并新規取開之場所者兼々場所漁業筋内願罷在候者之内にて身許人物とも宜き者相撰前書伝二郎同様漁業稼之名目ヲ以年々漁業出高之忒割五分ツ、上納為致一ト場所ツ、引分割渡し右取締改方等之儀ハ其筋事馴れ候もの之中人物相撰雇足輕申渡万端取扱方為致土人撫育筋等ハ深山幽谷ニ罷在候土人共ニ至る迨時々見廻り病者者御雇医師二而治療を加へ御料所相成御旨意何方迨も貫通致し候様仕右惣括之所ハ場所詰役々二而厚世話為致候は、追々取締も相立外場所々之儀も右闇き合にて自然取締候場合ニも可相成と存候一体漁業之儀八年々不同二而見留附兼御損益之程難予定候へ共三ヶ

年漁業取揚高を以出納凡差引候処当分御不足金も相立可申哉二候得共右ハ蝦夷地御入用金之内を以取賄ひ置可申尤新規漁業場所等追々相殖候上ハ其場所より取揚候石数を以御不足金之乏仕理相成見越之儀二者候得共両三年も相立候ハ、聊御益ニも相成可申と奉存候右之通改革仕候二付而ハ場所詰増人并出稼人等人物相撰早々申付其段追々申上候様可仕候依之此段申上候

以上

午四月

(本稿は平成十年三月十九日おこなわれた君尹彦会員の講演のテープをもとに高瀬たみが文字化したものです。したがって文責は高瀬にあります。)

石狩花畔土地改良区生振地区について

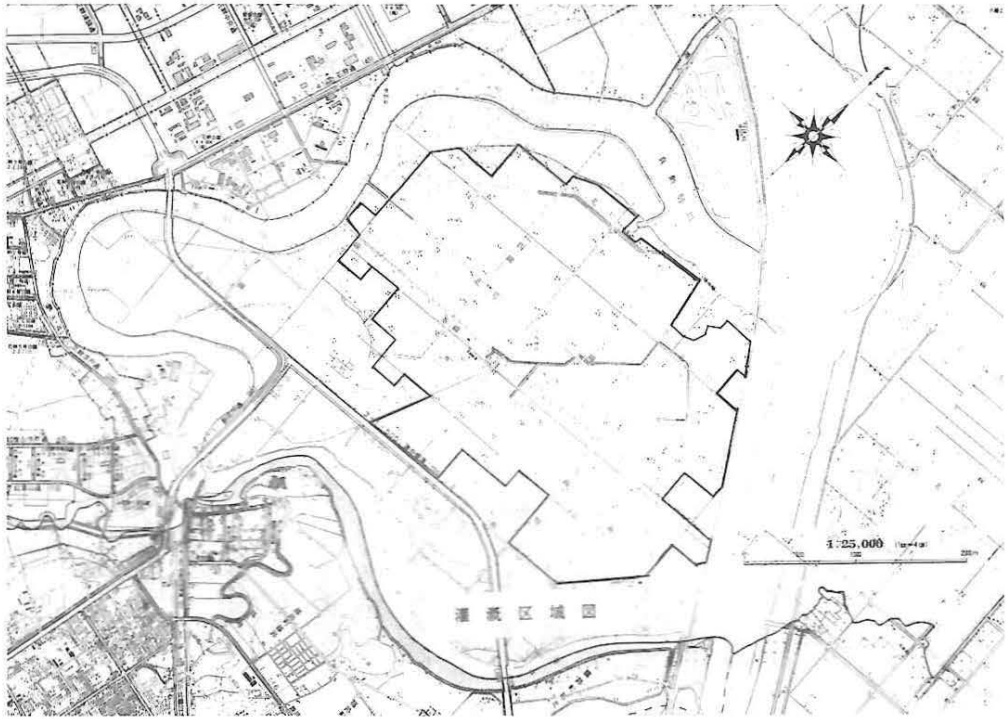
吉田隆義

昭和二十三年から二十四年の大干害がきっかけで畑ではやっけない、花畔は水田をやるのだから生振でもやれるのではないかと云う事になり昭和二十四年に村民大会を開いて決定し、二十五年に組合員数一三八名の農家によって生振地区の稲作水田の開田が始まったのである。計画面積五万二千百アールの水田が造田されたのである。真勲別川の上流に揚水主要施設を作り揚水機二五〇馬力一台と二百馬力一台とポンプ施設を五十馬力一台の揚水機によって、生振地区に大規模な灌漑稲作水田が作られたのである。開田時の反収は十アール当たり四俵から五俵であったが米価が安定していたので作付面積も安定していた。馬で水田をプラウで耕し水を入れてマンガで土を砕いて板を馬で引っ張って平らにならして田植えをした。水田の一枚の面積は五アールから十アールの面積である。昭和三十年代に入ってから馬から耕運機の導入、そして水田動力除草機の導入と機械化が進むにつれて水田耕作進展に伴う農業労務者の募集を東北を主にした本州方面（秋田、青森、岩手）への募集行脚が始まった。昭和三十六年には一五四名、昭和三十七年には一四八名。また、昭和三十九年には一〇六名と米の生産に伴う耕作技術が進歩して米の増収が年とともに進んできた。十アール当たりの反収も五俵か

ら六俵と大きく変わり、田植えには新琴似、栄町から田植えの出面が、五月の末から六月の十日頃まで働いていたのである。

改良区としては、米生産の基盤となったこの頃から大型トラクターの導入と水田の水張り面積の大型によりやっとな安定した収入になったが昭和四十五年により、自主流通米制度、稲作の一割減反（生振八割）と食糧管理制度の改正が主眼でついに米あまりになって生産調整となった。改良区内の組合員は米の減反とともに半分にもなってしまった。昭和五十三年から向かう十年を目的に、水田利用再編対策を打ち出し、ベナルティを伴った減反政策を強行することになって、減反は永久的な様になってしまった。

休耕田については畑作に戻り改良区内の水田後に生振大根、長いも、バレイシヨ、小麦、牧草と様々な作物が作付けされるようになったが生振地区内の高齢化が進み平成九年度改良区の賦課面積四万九千二百五十四アールのうち七十ヘクタールが水田稲作の面積になってしまった。また、札幌近郊の人に土地が売られ、組合員数は一四〇名と多くなったが水田面積が減少してしまった。現在の揚水賦課金については、主水、改良区で施行した水路より直接自然流下により水がかかる水田は、十アール、二千八百円補水は施設で、還元水から上げた水がかりの水田が二千五百円、特A、還元水を個人が利用している水がかりの水田、二千五百円、特B、改良区が揚



水した還元水を個人が利用している水がかりの水田で特Aより条件の悪いもの、千九百七十五円となっている。

現在の米生産者転作面積及び、主食用米面積、加工用米作付水張面積と農協が売る他用途米出荷面積となり複雑な米の流通機構となっている。また、良質米の奨励と食味の良い米でなければ売れなくなってしまっている。米の品種は、「きさら397」を始め「星の夢」が多く作付けするようになった。

一九八〇年三月六日 昭和五十五年二月

石狩花畔土地改良区三十周年記念誌より

座談会にて

吉田武雄氏の開田当寺の苦勞の記録

最初からの事を簡単に話して見ると、水田の動機は干魃もあつたが何と云つても食糧のない時代だったでしょう。生振は南瓜が唯一の収入であり食糧のない時代だったでしょう、生振は南瓜が唯一の収入減であり食糧の一部であった訳ですが二十一年頃まではいくらか高く売れたけれど終戦後の二十三年頃になったら南瓜も駄目になり、エン麦ではあまり収入にならなかつた。何と云つても米でなければと云う気持ちが強かつた、供出だけではそう魅力なかつたが技術的にも一生

懸命やれば多少はヤミで売れるのではないかと云う気持ちがあったと思うし、当時はヤミがペラボウに高かったので、造田しようと思ふ話は割合早くまとまった。それは二十四年の夏頃と思う。飯尾さんの世話にもなったが、それをやるにはどういう方法で行くかと云う事で、委員が決まるまでに道庁へ私もついて二、三回行った。その時には一足先に樽川、志美地区がまとまって道営工事でやる事が決まっていた。そこへ生振が割込んで行った。一番問題になったのは実施の方法で七割七分五厘の補助金出るが、道では順序からいって二十五年は樽川二十六年は志美、二十七年から生振と云う考えであった。それではどうにもならないので、しやに無二、樽川、志美地区にお願ひもし道に相談して同時着工にまで漕ぎつけたのですよ。これが第一の関門だったのです。而し、補助金は三年に分けて出るので一度には全部出ませんよと云う事になり三地区協議の上話合つてやることになったが、何だ彼だと云っているうちに、もう秋になってしまった。二十五年から米を穫ろうと云う考えだったので十月頃になってから着工する事になったが、いかげんにやる訳にも行かず道を退官したばかりの人を頼み第四事務所を借りそこで宿泊願ひ設計にかかった。地区の委員は農協長で面積も多い関係者だったので、松田（治平）さんが委員長、関戸肇さんが副委員長、お手伝いの様な形で委員になったのが宮前（茂重）さんと私と中田（栄次郎）君でした。宮前さんと私は除外地区、中田

君も関係なかったけれど農協の職員でもあり何とか手伝つてくれと云う事になり承諾した。先づ最初に技術屋が図面を開き一番問題になったのは、揚水場の位置だった。二ヶ所の予定地出して第一案の六川さんの山を検討したが結果的には第二候補地の現在地に決まった。決るまでに暫らく時間かかった。そして工事請負の組が三つ入り、名前忘れたが一番大きな組が五線の農協の土地（現在の学校地）に飯場を建てた。要が一番大きくブル持つていて東の方や中央をやり、揚水場の処から七百米位はブルで押した、西幹線が工藤組だったと思う。それ等の監督を宮前さんや関戸さんが担当した。一番困つたのは設計が遅れた事で、頼んだ人が六十にもなる人で夜もやってくれたが間に合わず設計出来ないうちに、工事や勾配や敷巾、天ば等解ければ仕事出来るものだから工事が先行してしまい、トラブル何回あつたかわからない。あまり急がせるので設計屋二回も辞めると云い出したり、その後若い人一人助手に頼んだが、三ヶ所も四ヶ所も一度に工事にかかる為それでも間に合わなかつた、正式に手続きしなければならぬのに村の人はそんな事考えなかつた。又、工事をやるには五〇二町歩以上の面積必要であつたが、四五〇町歩簡単に決まつたものの後の三十一四十町歩がまとまらず何ヶ月もかかり、それでも足りなくて、工事を全然やらないうころまで印だけついてもらいやつとまとめたが、その頃はもう工事を始めていた。それから何と云つても急がれるのが電気

とポンプだったが、又トラブルあり、十一月か十二月まで決らなかつた。他の地区は「荏原」にきまつたが宮前さんが強く「日立」にと主張し、後から水揚がらない時批判的になつた。道でも「荏原」にと云つたが最終的には「日立」に決つた。当時は質材なく発注してから作るので四月頃までに間に合うかどうか心配で中田君が東京まで確認行つて来ている。もう一つの心配は配電所で、生振は距離遠く送電線の関係等スツタモンダし漸く花畔經由で路線きまつたが、今度は電柱探して、それをやつと見付けたら長過ぎて馬車やトラックで現場まで運べず川を流して運んだりした。工事、機械、資料等短期間に準備するには非常に苦勞が多かつた。又、補助金三年払で工事が先行したので、すべて借入と当時は土功組合で借入資格なく、地元農協が借りて貸せと云う事で農協が資金の方を担当した。信連に相談し中金からも借りたがお百度参りで、何百回行つたかわからない、工事屋へは出来高払いで、借入もそれに合わせ五十米出来れば五十米分の設計書を付け借入申し込みし、又五十出来れば同じ方法で借入手続きしたが、せいせい長くて六か月、せめて一年ならまだ良いが短期間（継資金）より貸してくれず補助金は出ない。個人負担は集まらない等同じ様な書類を何回も作つて借りたり借換たり、工事屋だけでなく配電、日立、資材等それぞれ何通りにも小間切式に借りる為、借入に付きつ切りで昼夜なしに働いたので家から通う事出来ず「みなぎ旅館」（札幌）に七、

八人（他地区の人も）常時泊まり込みで仕事に奔走した。現場なりに苦勞多かつたがもう一つの苦勞は、配給時代で食糧難の為米集めが大変だつた。米食べさせなければ仕事してくれず、勿論ヤミ米の為表面には出せず、工事終るまでに何百俵も集めなければならなかつた。この書類は関戸さん保管していたが、二十五年に警察に調べられると云つてみんな焼いてしまふ等大変な苦勞があつた。二十七年に漸く補助金全部出たが三年間の借入で金利負担がかさみ、自己負担本来は二割五厘であつたがそれではすまなかつた。又、個人負担金を農協に借りに来たが貸す資金もなかつた。

政府米価買入価格(一俵玄米60kg)

大正 元年	8円22銭	昭和30年	3,902円
2年	8円22銭	31年	3,995円
3年	7円28銭	32年	3,850円
4年	4円37銭	33年	3,960円
5年	5円52銭	34年	3,966円
6年	6円	35年	4,117円
7年	8円48銭	36年	4,289円
8年	10円60銭	37年	4,882円
9年	20円	38年	5,030円
10年	14円20銭	39年	5,775円
11年	10円20銭	40年	6,308円
12年	10円40銭	41年	7,020円
13年	15円30銭	42年	7,677円
14年	13円60銭	43年	8,208円
昭和 元年	12円70銭	44年	8,218円
2年	10円85銭	45年	8,212円
3年	10円60銭	46年	8,631円
4年	10円40銭	47年	9,030円
5年	6円28銭	48年	10,390円
6年	6円50銭	49年	13,702円
7年	8円20銭	50年	15,612円
8年	10円80銭	51年	16,613円
9年	14円80銭	52年	17,086円
10年	10円90銭	53年	17,176円
11年	11円80銭	54年	17,279円
12年	12円90銭	55年	17,792円
13年	13円42銭	56年	17,859円
14年	16円35銭	57年	17,951円
15年	16円30銭	58年	18,266円
16年	16円50銭	59年	18,666円
17年	16円90銭	60年	18,668円
18年	18円42銭	61年	18,668円
19年	18円80銭	62年	17,557円
20年	6円	63年	16,743円
21年	220円	平成 元年	16,743円
22年	700円	2年	16,743円
23年	1,487円	3年	16,500円
24年	1,725円	4年	16,392円
25年	2,064円	5年	16,666円
26年	2,812円	6年	16,666円
27年	3,000円	7年	16,666円
28年	3,280円	8年	16,666円
29年	3,648円	9年	16,492円

石狩市八幡町高岡の通称地名調べ

小川 茂

私たちの郷土高岡は、明治十八年（一八八五）開拓が始められて百余年の歴史に輝かしい発展を遂げてきました。

先人が与えてくれたこの緑豊かな恵まれた土地に、今は平和な生活が営まれています。

多くの先人達が風雪に耐えて艱難辛苦を乗り越えて、たゆみない努力により今日の礎を作ってくれたことを忘れず、これからも立派な後継者を育成、後世に残したいものです。

さて、長年住んできて、現在まで深く気付かず過ごしてきた高岡の地名の由来について調べて見ましたので、その結果を報告します。なお、この調査は平成九年三月にまとめたもので、顧問の田中實氏には校閲並びにご教示を頂きました。心より感謝申しあげます。

一 「学校地」（がっこうち）

この地名は、高岡入口（国道三三七号から市道高岡一号線に入る。）から北に向かって高台の一部までを指し、大部分は平坦地です。

ここは、八幡町の市街から当別町通する幹線道路に近いことから、開拓当初はかなりの入植者が居住していた所でこの向い側（生振村十線北）の道路沿いにも大熊病院や商店、民家がありました。この辺の土地は肥沃で、地下水も豊富で二、三メートルの井戸を掘ると

十分な生活用水が確保できました。一方、高台では水を沢から運んだり、十、二十メートルの穴を掘って溜まった水を使ったりして大変苦労したと聞いています。このように、「学校地」は当初は人口も集中し生活上も便利であったことから村の中心であり小学校建設計画されました。しかし、その後水害から逃れるために高台に移住する家や他に土地を求めて転出する家が相次ぎました。また、知津狩川沿いの低地に入植した山口県団体員も水害から高台に転居しこの地区の人口は年々少なくなっていきました。後述するように、小学校は高台に建つことになりました。恐らく「学校地」の地名はまだ人口が多かった時、ここに学校を建てる計画があったことから生まれたものと推定されます。

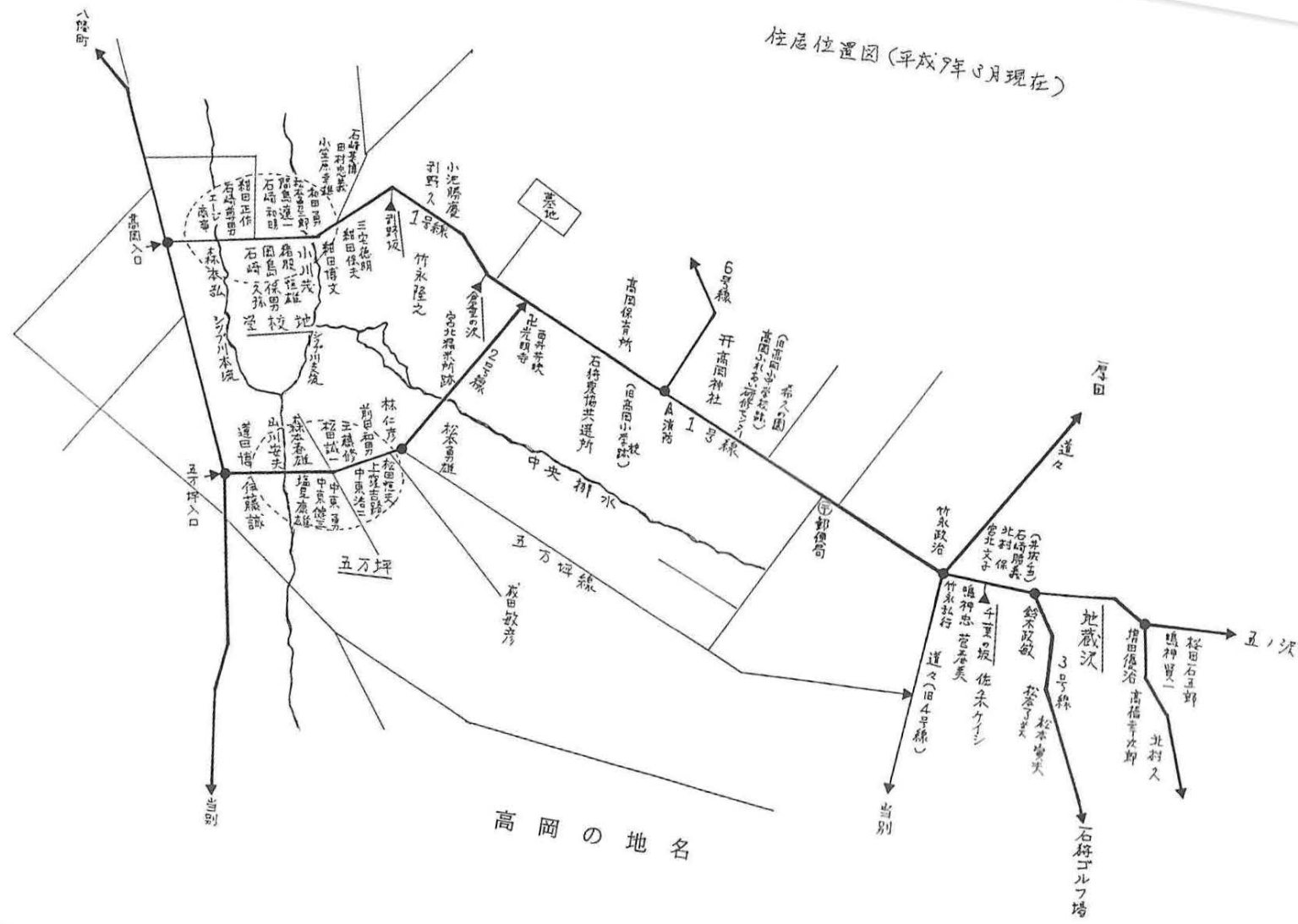
ちなみに、高岡小学校の歴史は明治三十二年（一八九九）八月二十三日「石狩尋常小学校高岡分教場」開設され、同三十四年四月二十三日に「高岡尋常小学校」となり同時に校舎も増築されました。

初代校長は、学校地に早くから入地、農業を営んでいた私の祖父にあたる小川茂助の隣り居住していた萱場孫吉です。同氏は多くの土地をもっていました。明治二十二年九月から同三十四年四月二十三日まで勤めていた石狩小学校から高岡に校長として着任し、同三十四年から同三十九年まで五年間在職しました。

また、同氏は高岡分教場開設前から学校地の自宅で高岡の子供に勉強を教えていました。

なお萱場家と小川家の関係は、孫吉の長男今朝雄と茂助の長女ヨシが結婚しています。今朝雄は明治二十九年七月二十三日から同二

住居位置図(平成9年10月現在)



高岡の地名

十年十二月二十九日まで石狩小学校に教員として勤め、その後は北海道庁職員となりました。

さらに、茂助の四女ミツは高岡小学校十代目校長の千葉宏平と結婚しています。同氏は石狩市内の教員を二十五年以上勤めたことにより昭和四十三年開町百年記念式典で教育功労者として表彰されています。

二「引野の坂」(ひきののさか)

学校地から高台に登るところにある坂を「引野の坂」といいます。この地名は坂を登ったすぐ左側に引野家があり、そのためできました。この坂は現在にはゆるやかですが、かつては急坂で、荷馬車の通行が困難なほどでした。その後、何度も改良が加えられ現在のようになりました。引野家は明治三十年代半ば、石狩町仲町からここに入地し、初代芳蔵氏に始まり二代目引蔵氏を経て三代目の現在に及んでいます。したがってこの地名は明治三十年代半ば以降生れた地名ということになります。ちなみに、高岡全戸に電灯が点つたのは昭和二十二年九月二十日で、戦前は戦争のため都部を残してこの引野の坂で止まっていた。戦後すぐ私が代表となって北電と交渉の結果、やっと電気がひくことができました。

三「千葉の坂」(ちばのさか)

高岡上台を通過し五ノ沢に向う一番目の沢を後述するように「地藏沢」と呼んでいます。この地藏沢手前の坂を下った右側の狭い

平地に「千葉忠四郎商店」があったことから生れた地名です。ちなみにこのような個人に関係する地名を紹介すると「西村の坂」というのがあります。この坂は、国道二二二一線を石狩八幡市街から知津狩川を渡って厚田方面に行くと厚田村聚富の高台に登る急坂がそれです。この坂の登り口の所に西村家があり、この地名もそこから生れたものと思います。

四「地藏沢」(じざうざわ)

資料を調査しても、古老のお話を聞いてもこの地名についてははっきりしたものはありません。しかし、古老のお話などによると「開拓当初、行き倒れか作業中に熊に襲われたか、事故であったかは定かでないがこの付近でなくなられた人があって、最初は供養の塔婆を建てたが明治末、地元の心ある方十数名で地藏を建てて弔ったことから地藏沢の地名ができた。」といわれております。亡くなった方や事件の記録はありませんが、現在の地藏尊があることから地名はこの地藏尊に関係するものと思われ、おそらく地藏尊は何らかの供養のために建立されたのでしょう。

地藏尊の建立は明治四十四年(一九一一)旧七月十三日です。発起人は青山丈助、増田岩吉で寄付者は、増田岩吉、神原政吉、国見林七、井戸川宗次郎、長谷川十五郎、増田弥助、青山丈助、千葉宏平、宮本シモ、赤山〇ミ外数名と台座に刻まれています。

五「五万坪」(ごまんつぼ)

道々石狩当別線から左に分かれる市道の高岡二号線を通って高岡上台に登ったところが「五万坪」です。この地名については二つの説があります。一つは「片倉市蔵氏が五万坪(約十六万間五千平方メートル)の土地貸下を受けてここを開拓したからだ。」という説でこれは昔からいいたえられてきたものです。もう一つは「小笠原伊太郎氏、小笠原権四郎氏の兄弟二人も土地貸下五万坪を受け開拓したからだ。」という説です。こちらの説は、現在も学校地に居住の開拓四代目の小笠原幸雄氏が亡父岩太郎氏から聞いたものです。詳しい記録がまだ見つかっていないのではつきりませんが、いずれにしても開拓当時の土地貸下にまつわる地名だと考えられます。

六「新高岡」(しんたかおか)

高岡の東に隣接する当別町高岡は明治 年の入植で石狩市高岡よりも早く入植したことや同じ高岡で紛らわしいことから戦前まで「新高岡」と呼んでいました。

参考文献

- 「高岡小学校閉校記念誌 道究」平成元年
- 「高岡百年」高岡開基百年記念事業協賛会 昭和五十九年
- 「石狩小学校開校百年記念誌」昭和四十八年

石狩地方史ノート一

樽川の運河・生振の養鶏・八幡の馬市

鈴木トミエ

樽川の運河

北海道に開拓の鉤がおろされた当時、札幌から石狩湾にいたる区域は札幌原野と呼ばれ、沼沢地と泥炭地、低湿地が大半を占めていた。

この文章は、平成八年に北海道開発局によって建立された碑「花畔銭函間運河跡」に刻まれた碑文の一部である。碑は茨戸川河畔にあるが、冒頭にあるように明治初期、湿地帯であった原野を排水によって居住可能な土地に、さらに農耕に適した土地に変える必要があった。それには、石狩川の水位を低くし洪水をなくさねばならない。さて、どうするか。思案のすえ、解決策として出されたのが、石狩川（現在の茨戸川）と日本海に通じる運河をつくることであった。それによって湿地帯の排水も良くなることのでき、運河を使って物を運搬できるので、一石二鳥であった。

工事は明治二十八年五月に着手、「札幌・茨戸間運河」と「花畔・銭函間運河」の二つを作ることになった。二つの運河の設計者は、後に石狩川治水事務所の初代所長となった岡崎文吉である。二つを利用すると、札幌から銭函まで舟で物資を運ぶことができた。当時は道路が整備されておらず、馬車による運搬が困難で、舟運に頼るしかなかったのである。

「札幌・茨戸間運河」は現在、創成川として残っているが、「花畔・銭函間運河」は茨戸川近くに一部残っているだけである。

明治二十八年五月七日付けの「小樽新聞」には、承認前の花畔銭函間の運河設計が「雑報」として掲載されているが、その中で注目したい箇所がある。

第十六・運河の浚渫に就いて―花畔より銭函に至る運河線に沿える土地は、大概砂質のなるを以って運河掘鑿兩岸の土砂漸次潰崩し且つ暴風砂塵を飛ばして運河底を埋没する恐れあるも浚渫を行うときは運河を維持するには甚だしき困難なる可し。第十七・防風林に就いて―運河の埋没を防ぐために運河線に沿ふて防風林を設くる必要あり防風林を設計は昨年二月巳に之を豫側し了りりと報道している。

岡崎文吉は、治水にあたって森林を重視した人である。運河を設計するにあたっては石狩川が氾濫した場合、防風林があることで降水の多くを吸水すること、また、洪水時の水面の高さを低く抑えることができるなど、防風林を設計の中に取り入れた。にもかかわらず、運河に沿って防風林を作った形跡がみられないのである。

「花畔・銭函間運河」は、総工費がおよそ七万五千円で明治三十年十月に完成した。当時、樽川や花畔の農家の人たちは掘削工事に従事したが、このことを知る人はすでになく、親からの聞き伝えとして樽川の人々は次のよう語っている。

工事は全部人の手で掘られ、人夫の中には恐ろしい人がいた。

一、美戸鐵函間運河第三區工事
 一、全入札保証金每區各自入札金高ノ百分ノ七以上
 此入札保証ノ者ハ當廳土木課ニ以テ工事請負手續
 右請負業仕様書等ヲ悉覽シ尙ホ現場詳知ノ上六
 月廿二日午前十時限入札保証金及身分證明書
 相添ヘ分課ヘ入札書差出スヘシ同時附札大此契
 約ハ北海道廳長官印保太郎之ヲ擔任ス
 明治廿九年
 六月八日
北海道廳

此入札保証金ハ何レモ各自入札金高ノ百分
 右請負業仕様書等ヲ悉覽シ尙ホ現場詳知ノ上五
 月廿三日午前十時限入札保証金及身分證明書
 相添ヘ分課ヘ入札書差出スヘシ同時附札大此契
 約ハ北海道廳長官印保太郎之ヲ擔任ス
 明治廿九年五月八日
北海道廳

運河工事入札の広告(小樽新聞)
 (資料提供 河野本道氏)

工事中に死んだ人夫もいたと聞かされました。Ⅱ釣本ハルV(『拓
 』より)

△運河を掘っていたころ、タコ部屋があつて私の父親もだまされ
 入った。父は力があつたので棒を持たされて監督をやらされ、
 イヤになつて帰つてきたⅡ中島久一V(同前)

工事は北海道より民間の業者に発注され、さらに孫受けされて
 タコ部屋がつくられて取り組まれていったようだ。

運河は、明治三十一年の洪水で大打撃にあつたが、修復してそ
 れが完成したのは三十四年。砂地だったこともあり運河の両サイ
 ドが崩れて、水底に土砂がたまる。水の流れが少ないときは、運
 搬人が土手でロープを使い荷積みした舟をひいて進むこともあつ
 た。明治三十八年まで、「花畔・銭函間運河」には穀物を積んだ
 小舟が頻繁に往来した。

「花畔・銭函間運河」は、その周辺に住む人たちにいろいろな
 方法で利用された。夜盗虫が発生して作物が全滅した年があつた。
 農薬の無い時代はなすすべも知らず、くるしまぎれに古老たちが
 虫を袋に入れて川に流したという。それにあやかつたかどうか、
 千ばつの年には神主をよんで雨乞いの祝詞をあげ、えん麦のワラ
 を使つて「蛇体」をつくり運河に流した。それとは逆に、大雨が
 続くと運河へ灯ろうを流し、雨が降り止むのを祈つた。釣本ハル
 によれば、麦ワラの「蛇体」を運河に流す行事は、村じゅうが総
 出で行い恒例となつていたようだ。

「花畔・銭函間運河」は、総延長一万四千五百メートル、水面



『石狩川治水の曙光』所収

の幅が四・五メートル、水深は一・一メートル、底幅は三・六メートルであった。竣工時の運河の両幅はすべて板棚で、開門（こらもん・ときどき開閉して用水や舟を通す水門）は三個、石狩川付近には防水門が建設されていた。明治三十四年に運河を利用した通船数は千四百五十隻、貨物個数は五万四百七十七個であった。運河が完成したものの、予期しないことが起きた。石狩川の水面が運河の水面よりも低いため、舟を浮かべるには水が足りないのである。

△石狩川の常水面は運河の下底より猶低くして充分水流を導くこと能わず。従て水量常に乏しくて舟を浮ぶるに足らざるなり。オタナイ川以南は運河内小舟往復するといえどもこれを往復せしむるに能わず（『石狩状況報文』河野常吉）

運河は舟の往来に支障は出て来たものの、湿地の排水には成果をあげた。しかし、その後、道路を利用して馬車運搬がおこなわれると、舟運は衰退した。

明治三十八年以後、運河はどのように石狩の人に利用されたか。昭和十八年の春、雪解け水が引かず樽川の人たちが総出で運河あとを掘り排水したことがあったと、林栄信（大正二年生まれ・新港東在住）さんが語っている。釣本権一さん（大正八年生まれ・樽川在住）によると、運河は戦後、水田を作るようになってからは排水路として使用されたこともあったという。

「私が運河について聞かされたのは、四線と八線、花畔の下野さんの所にそれぞれ杭と板を入れて溜まり場を作り、ここで舟の交差や荷物の上げ下ろしをしたそうです」前述の釣本さん。

昭和五十年以降、石狩湾新港の建設によって新しい道路ができ、樽川村内の運河跡は跡形もなく消えた。現在では冒頭でふれたように、茨戸川付近の花畔地域にわずかに残っているだけである。

生振の養鶏

「私の家では、いっところから孵卵器を使って養鶏をはじめたのか、はつきりしません。私がもの心ついた時にはすでにやっていたね。祖父の代からです。昭和十七、八年まで孵卵器を使って鶏の繁殖をしていました」と、吉田重男さん（大正十二年生まれ、生振在住）

生振の農家はほとんどが畑作だったから、規模は違うが吉田さん

のように養鶏をするところが多かった。とくに、愛知県団体で移住した農家の人々は、出身地が養鶏の盛んな所ということもあり、意欲的であった。

吉田さんから、孵卵器を使って繁殖させる方法を聞き取りしたので、以下に述べる。

▲孵卵器のなかの箱にはおよそ百二十個、スラリ並んだ卵が三週間経つと鶏のヒナにかえっている。卵の固い表面をクチバシで傷つけているのもあれば、カラを破りビヨビヨと頼りなげに鳴いているものもある。まだ、カラの中にうすくまっているヒナもいれば、元気に首をだしているのもいて様々である。いずれもまだ、カラから出て独り立ちできないヒナばかりだ。ヒナを一つずつ丁寧に育雛器（いくすうき）へ移し替える。育雛器はヒナの保育器みたいなもので、そのなかの温度はおよそ摂氏四十度、親鳥に抱かれて自然繁殖するのとは違って、育雛器のなかで育てるには温度調節をしっかりとせねばならず、実に神経を使う。温度を上げるには、当時、電気などなかったから炭火を使った。昭和十年頃のことである。炭火は育雛器の真ん中に置いた。熱を逃さぬよう、周りの金網に布を覆いヒナが自由にできるよう、少しだけ開ける。ヒナは数日間たつと鶏冠が開始める。そこで別の育雛器にまた移動。鶏冠によってメスとオスに分け、メスは残すが、オスは繁殖用の種鳥を残して後はみな、可哀相だが焼鳥屋へ行く。メスの鶏は、およそ六カ月でタマゴを生む▼

秋の収穫期過ぎでなければ現金収入がない農家にとって、タマ

ゴの売上代金は僅かであっても重宝した。吉田さんの家では農業のかたわら、副業として養鶏をしていた。孵卵器が五台、育雛器を四台いれて鶏を繁殖。自然繁殖の場合、一羽が抱える卵は十二から十三個ほどである。孵卵器を使った場合、一台で十羽分の働きをするのだから便利であったことは確かだ。

明治後期の話になるが、春光寺の住職として入地した前川月深師の記録によれば、明治三十四年に養鶏の収入が十七円、三十五年には二十四六十銭とある。同年、果樹園経営者でもあった小畑謙治が、およそ五百羽の名古屋コーチンや黒色ミノルカ、横斑口ツクを養鶏していた。さらに、明治三十七年には、樋口鉄次郎が愛知県に帰郷のさい、鶏卵を持ちかえって孵化させたという話が残っている。

大正六年に発行された生振小学校の「郷土資料」には、

▲当村には養鶏家と称する家三軒（他は副業）、雌雄で五〇〇羽、雌四八八〇羽は一カ年産卵一四四（注・一羽平均）、この代金一ケ二銭三厘で七〇万二七二〇ケとして一五四九八円四〇銭Vと記されている。

当時、農家で飼われていた鶏の種類は雑種が多かったが、次第に収入を重視するようになり、採卵率の高い白色レグホンに移行した。昭和二年三月には生振村全体で七千羽、一戸あたり平均九十羽を飼育。当時、道庁で奨励していた一戸あたり十羽より、はるかに多い数を飼育していた。昭和二年三月十三日付の北海タイムスは、

大正初年頃に於いて五千羽の飼育数を見しが、その後おおいに衰（おとろ）ふに至ったので、同村尾張団体開拓の祖たる佐藤安次郎氏は挽回策を講じ、大正十三年春斯界（しikai）に多産系として令名ある純血タンクレット系白色レグホン種の雛を購入し、極力之が繁殖並びに産卵調査をなす（以下略）と、白色レグホンに移行した事情を説明している。また、佐藤は六百卵入り孵卵器を本州方面より購入して、タンクレット系を繁殖させ養鶏の発展を試みていた。

その後の経過をみると、昭和七年に全村で五千三百七十二羽、昭和八年には四十三戸の農家が千四百七十八羽を飼育。同年には、三十三万二千個の卵が売り上げられた（見積価格は七千六百三十六円）。農家の人々は、こそつて孵卵器を使い繁殖させるということはなく、抱き鳥で自然繁殖させる程度の規模であった。自家用でタンパク源を補うため鶏を飼育、また卵を売って現金収入を得た。

卵は札幌の民間の「卵屋」が、籠をかついで買いにきたという。戦後、生振の農家も造田工事を経て畑作から水田へと転作、昭和三十年代には水田経営が安定した。農作業は機械化され、馬を飼育することもなくなった。札幌の集乳所が亡くなったため乳牛の飼育は衰退。そうしたなかで注目されたのが養鶏であった。

戦前と変わったことといえば、飼育方法がケージ養鶏という多羽飼養になったことだ。四十一年一月には「養鶏会」が設立され、農協で取り扱う共同出荷体制の確立を目的とした。四十二年には

百十戸の農家が、一万三千百二十八羽を飼育。同年、ニューカッスル病が発生し、全村の養鶏が緊急予防注射の対象となる事故にみまわれた。しかし、困難な状況を克服し四十三年に食肉処理場を開設。四十六年には約一万九千羽の鶏が飼育された。

順調に伸びてきたかに見えた養鶏業も、四十八年のオイルショックによる飼料の高騰で経営はむずかしくなった。また、五十年代に入ると、大手企業による大規模な経営をする養鶏業者が台頭してきた。さらに追いうちをかけるように、卵の価格が不安定となり、五十年代半ばには六戸、三千羽ほどに減り、現在ではその姿を見ることがなくなった。

八幡町の馬市

昭和五十年に、八幡町と若生町に住んでいた人々は、石狩川築堤工事のため移転をよぎなくされた。立ち退きはしなかったが八幡三丁目の八幡町母子会館（平成四年二月に廃止）の辺りは、昭和十年代には馬市が盛んにおこなわれていたという。

この広場には牧柵が張りめぐらされ、同時に、セリ場の周りの一角では、牛の結核検査や馬の種付けも行われた。昭和五年に「石狩畜産改良会」が組織され、馬の改良と増殖をおこなったため、町内でも優秀な馬が生産されるようになった。道庁でも種馬事業を積極的に奨励、優秀な農耕馬に改良するため馬の貸与制度が確立されていたから、道から種馬を導入し一般農家もそれを利用した。また、畜産改良会が管理する馬もあった。

「馬市が行なわれていた東側では、わずか一日だが草競馬もしていた」と、当時を回想する小川茂さん(大正五年生まれ・八幡町高岡在住)。

昭和十二、三年頃のことだが、セリ場の広場では二歳馬を綱で引いて一周するのはいつもの光景で、当時のセリ人として石山右一さんが活躍した。周りには、馬を一銭でも安くセリ落として高く売ろうという、家畜商(馬喰ともいう)たちがひしめきあっていた。

「石山さんは、広場の中央に立ち止まった馬を見て、声をいちだんと張上げ最低の価格を提示するのですよ。するといつせいに家畜商たちが、値段をつり上げた。セリに出された馬は五、六十頭くらいあったねえ」とは、前述の小川茂さん。

セリ落とした馬は、家畜商がセリ場に来ていた農家の人に売った。また、家畜商同志が馬の売り買いをすることもあった。その時の価格は、帽子の下にお互いの手を入れて、親指なら〇〇百円、人差し指なら〇〇十円と交渉しあい、値段を成立させる。こういうやり取りがいたる所で見られた。

『北海道石狩町勢一班』によれば、昭和五年に石狩町内にも二十九の牛馬売買業者がおり、種馬のベルシユロンが四頭、内国産洋種が三頭いた。雑種を合わせると、千三百四十九頭の馬がいた。八年には七頭の種馬と、千三百二十一頭の雑種馬が飼養され十年には千三百六十四頭の雑種馬が飼養されていた。

馬市が始まるのは秋。市がはじまると、八幡町の旅館、大川屋

ではたくさんの家畜商たちが宿泊した。馬市は数日間にわたって開催されるから、その間は馬市関係者だけの貸し切りだった。夜になると泊まり客の間で、セリに出された優秀馬の話でもちきりになり、座は賑わった。するとまた、馬の売り買いの話になり、座布団の下で指の値段交渉が始まった。

石狩で馬市が一番盛んだったのは、軍馬を出すようになった昭和十四、五年のころである。全道各地から馬をセリ落とす人や、関係者を合わせると百人くらいは大川屋に宿泊した。数日間も馬市が続くので、宿は客が多くて蒲団が足りないほどだった。

「断つてもだめで、客は着のままでのいいから、と宿泊しにいった」と、大川修司さん(昭和九年生まれ・八幡町在住)は母親に聞いている。ニツカズボンに半纏姿、胴巻きをした一目でソレとわかる人たちが八幡町にあふれ、もう一軒あった成田屋旅館でも収容しきれず、他に民宿も利用したようだ。

参考資料

樽川の運河

「小樽新聞」明治二十八年五月七日付、『石狩町沿革史』石狩町昭和六年、『九町三村時代の石狩』長谷川嗣編 石狩町誌編集委員会 昭和四十四年、『拓く』樽川開村百年農事組合設立十年記念事業委員会 昭和五十七年、『石狩川治水の曙光―岡崎文吉の足跡』北海道の治水技術研究会 北海道開発局 平成二年

生振の養鶏

「北海タイムス」昭和二年三月十三日付、『生振開村百二十年』記念誌編集委員会 平成四年、『生振村愛知団体開拓百年史』記念誌編集委員会 平成五年

遊び心で推論した生振地名考

吉野 惣栄

はじめに

私が生れ、育った村は明治四年五月二十五日、平岸村、月寒村、花畔村、対雁村等と一緒に、右村号御改正相成度と、誰が名付けたか開拓使によって、生振村と漢字で村名が布達され今日に至っている。

(一応は岩村通俊判官が名付親と云うことになっている)が私は実際は、蝦夷地探検家として有名な松浦武四郎でないかと思っている。

明治二年政府が開拓使を新設して蝦夷地の開拓に着手した時、武四郎は同年六月蝦夷開拓御用掛を仰せ付けられ、同八月には開拓判官に任ぜられ彼が長年の蝦夷地探検家としての経験と知識を生かして、北海道の道名、国名、郡名を選定したのが彼であるとされているところから、翌三年三月早くも退官しているが、もしかしてと推論した次第…。

当時開拓使では、村作りをするにあたり、地名をアイヌ語に①そのまま漢字を当て嵌めるか②訳して漢字にするか③それとも全く新しい地名にするかで色々議論されている時だったので探検家としてアイヌ語に精通している彼が預かって力があつたのではないかと考えたのである。

例えば、北海道の地名の十中八・九はアイヌ語に起因すると云

う、今は使われていないが国、郡、は言うに及ばず大字、小字で難解な漢字を当て嵌められている地名のほとんどがアイヌ語によるものであり生振も日本難解地名の十傑に入っている曰く付きの地名なのだ。

地名に対する疑問(1)

私達の小学生の頃はオヤフル、生振とはっきり発音しているのは小学生と、学校の先生及び公職についている極く僅かの人達だけだった。

ではなんと呼んでいたのか古老や近隣の人達は末尾がルでなく口と、「オヤフロ」これが一般だった。

だがこれは町内でのことで、町外(支庁)になると色々でオヤフルと正しく呼ばれることはほとんどなく、オヤフロも少なくなかった。

大抵はオイフリかオイブリだった。

それでは活字ではどうだろうか探すことにした。書店、古書店を尋ね、古書通信で探求し次の本を手に入れることが出来たが結構な物入りだった。

石狩川、大日本地名辞書、北海道蝦夷語地名解、アイヌ語地名解、アイヌ語入門、北海道地名誌、蝦和英三対辞書、地名アイヌ語小辞典、古きを尋ねて、北海道地名小辞典、日本地名大辞典(1)(2)、北海道の地名、アイヌ語地名の研究、アイヌ語地名の輪郭、札幌のアイヌ語地名を尋ねて、北海道の川の名、アイヌ

語地名を歩く、東北北海道アイヌ語地名考外に松浦武四郎関係十数冊

地名に対する疑問(2)

生振の地名漢字のうち「振」はそのまま訓読みすればいいから問題はないが頭の「生」がどうしても判らない

解 析 (1)

疑問(1)(2)については本庄陸男の「石狩川」に、二ヶ所二十三ページと百十二ページにオヤフロと出ていた、おそらくアイヌはオヤフロと呼んでいたものと思う。

それでは、集めた本の訳を紹介すると

蝦夷語地名解 永田方正

Oya・furu 他の丘、又は次の丘

アイヌ語辞典 磯部精一

Oya・huru 他の異なる坂

アイヌ語入門 知里真志保

Oya・huru 川尻の岸にある丘

地名アイヌ語小辞典 知里真志保

Oya・huru 川尻が陸岸についた丘

北海道地名小辞典 三省堂

アイヌ語の次の岡

北海道地名誌 NHK北海道本部

アイヌ語の生振で川尻の岸岡の意

アイヌ語地名解 更科源蔵

アイヌ語のオヤフルに漢字を当てたもので「川尻」という意味で、場所は生振六線南二号の三角点のある丘(十四メートル)だが昔は湿原の中にある高みで生活上大事なところであったので名付けられた。

このように場所まで示しているのは珍しい。

しかしアイヌの地名は地形地物を利用した目印だとすると場所まで知らせるのが親切と言うものだろう。

北海道の地名 山田秀三

Oya・huru 尻が陸地についている丘で根本のくびれたような処を呼んだ名である。調べた限りでは、全て、オヤフルの地名解であり、アイヌ語オヤフルに漢字を当てたものとなっている。

しかし私は、どうしても子供の頃一般に使われていたオヤフロの地名解はないものかと折に触れては尋ね続けたが遂に断念せざるを得なかった。

そこで今まで調べた範囲内で纏めてみることにした。するとジョン・バチエラー博士↓磯部精一氏による流れと、知里真志保博士↓山田秀三氏の流れに分かれることに気付いた。

アイヌ語地名は単語一つの簡単なものから複数の単語を続けたものとある。従って地名をどう分解するかによって違ってくる。

勿論こうした場合でも一定のルールはあると思う。

だが私は学者でない、全くの素人である。少しく人より凝り性

だと云うだけだ、自由な発想で答を出してみたい。

まずオヤフルを分解すると、

ジョン・バチエラー博士 O y a i f u r u

知里真志保博士 O i y a i h u r u

このように分解の仕方が違うし、検証の仕方も違う、ジョン・バチエラー博士は古老からの聞き取りに重点を置いているので、直訳がほとんどで何のことか判りにくい。それに引かえ、知里真志保博士は、アイヌ語地名の現地を踏査し、地形地物の合致するところを名付けた。

私は知里博士系のもので一番現地に即応するように思うので博士の本を参考に素人の大胆さでオヤフルをバラバラに分解して、アイヌ語の意味で繋ぎ合わせるとどうなるか試みてみることにした。

オ(O) 川口、川尻、陰部、脛、人間の口が体内へ食物の入って行く入口であるように川の口もまた鮭や鱒が海からきて、川の体内、或ひは陸の体内に入りこんで行く入口と解釈する。又は陰部という意味も含まれている、川は普通には女性と考えられ、従って陰部といっても川の場合は女性のそれを指している。別に陰部、脛、を(ho)とも言う。

ヤ(ya) 土地、陸地、岸

フ(hu) 生(なま)の、生れる

ル(ru) 路、道

ロ(ro) 右に同じ、となった。

オヤは何とか理解し得るし、地名解釈に役立つと思うが、フル、生の路、生れる路では全々適当でないように思うが、オ(O)が川の口で鮭や鱒が海から来て陸の体内に入る即ち、石狩川に入る入口だとすると少しく難解だが立派に意味は通じると思う。これで疑問の一つ生振の生の字、読み方は、ともかく生である。

私の試みは無駄でなかった。知里博士は言う。地名解釈には、その他にも方言や、特殊語に対する知識も必要だし、あるいは古い時代のアイヌの生活や、物の考え方などについても、一応知っておくことが望ましい、と古い時代のアイヌは川を人間同様の生物と考えていた。例えば水源を(川の頭)と呼び、川の中流を(川の胸)と呼び、川の曲がり角を(肘)と呼び、幾重にも屈曲して流れている所を(腸)と呼ぶと言う、更に川はまた生物であるから生殖行為も営む、それで二つの川が合流しているのを(お互いを抱いている川)(抱きあっている川)とか(陰部をつけあっている川)(交尾している川)等と言って各地にその地名があるとと言う。とにかく生振の名付け親は非常にアイヌ語に精通していたことに驚きを感じた。

そこで裏付けの為の参考を探って見る。

古い紀行文による歴史的検証

松浦武四郎、「石狩日誌」安政四年五月十二日のところを見ると、

…暁に船のとも綱をといて河に舟を出す、フル(来札)シビヤウ

ス（志美矢臼場）オヤウ（生振）あたりに来ると、川の兩岸にその辺のアイヌ達が集まってきていて、私達が川上に行くのをうらやましがったり、家族に伝言を頼むものもあり大賑わいである。

この中でまず一番に出てくる地名フル（来札）一つおいてオヤウ（生振）、書く人によってオヨウ、オヤフである。フルとオヤウは少しく離れているが、紅葉山砂丘を除けば全く茫漠たる一大平原である。本庄陸男も「石狩川」の中でオヤフロの大原野と書いてある。これを広域地名として一ヶ所と見ることは出来ないだろうか。それよりまずオヤウを解いてみよう。

オ（o）川口、川尻

ヤ（ya）土地

ウ（u）場所：の在る広い所

これは川口または川尻の広い所（生振原野は四、五mの平坦な広い土地で、昔はもとより終戦後でもまだ私達が呼称していた旧村に符号するその場所は五線北三号無名川に沿って四、五軒のアイヌのコタンがあり、私達はコタンと呼はず旧村と呼んでいた。

住人は、豊川アンノラン、豊川富作、上川ウコヌカル、内山ナイトク、河合定治、であった、この全部の消息は判らないが豊川家だけは今も住んでいる筈。このようにオヤフル（口）の語源はオヤウからとつたに違いない。

先に「石狩日誌」で紹介したフルは来札にある砂丘のことで、この他にも古地図の石狩八幡神社のあたりにもフルと書き込まれているのを見たことがある、この場合フルは海岸砂丘をアイヌは

目印とし地形地物に名付けていたので何ヶ所あっても不思議ではない。

オヤウとフルを以って広域地名としなくてもアイヌの生活の中で使われている間に、または和人が入ってからオヤウフルがオヤフルに短略化されたとも考えられる。末尾のルと口は意味は同じでアイヌは厳しく区別していない。

この他にも明治四十四年吉田東伍博士著の大日本地名辞書、石狩郡生振村のところにワツカウイ、テイネイ、オヤフ、などというも此の地にあたりと書いてある。

こう調べてくると更科先生のアイヌ語地名解に出てくる生振の地名解説は親切に場所まで示してくれているがオヤウを見落とししている。

従って、他の先生方のように場所に触れない方がよかった。と、私は、色々の賞を受け、アイヌ民族の研究にも知られた先生だけに残念だと思う。

それでは先生の示した六線南二号の三角点のある岡に代る場所とはと言うと私は十一線北三号、子供の頃、後藤の山と言っていた三角点十八メートルのある岡がオヤフル「川尻の広い土地のある岡」が一番条件が合ったところでないかと思う。

ここに登ると西南だけは、紅葉山砂丘に遮ぎられて一部見通しは悪いが他の方角は実によく望見出来る。アイヌにとって此処こそ物見張場とし、烽場と、生活上重要な岡であったに違いない。

山田先生はアイヌ語地名の大部分は目で見た地形の名であると、

述べている。

この他にも先に紹介した解釈の中の「他の丘又は次の丘の」関連は、六線南二号三角点のある岡からの次の岡は何処だろうか、伊藤の山（地藏さんの山）か、或いは遠く旧石狩川を超えた元谷口農場の入口、今はないが四阿（あずまや）のあった瘤状台地を指すのだろうか、私なら躊躇なく次の丘は佐々木の山だと言う。

以上。

生振地名考 続 生振の山

私が先に書いた後藤の山と言っても十八メートル三角点があり生振では一番高い山だ、此処から順に吉野の山、佐々木の山（又は墓地の山十七メートル）伊藤の山（または地藏さんの山）萱野の山に次いで更科先生が示した六線南二号十四メートルのある山となる、従って標高からすると山とは言い難い岡である。

私の家から眺められる北東から東にかけての山々を高岡海岸段丘と言う十八―二十五メートル、少し右によって知津狩段丘の中の嶺泊段丘で二十五―三十五メートルその右が当別段丘で二十五―五十メートルそれより奥が地藏沢で高位段丘六十五―一〇〇メートルこうしたことからも遠慮で山などと言えない筈だが原野の中の高台なので結構高く感じ村の人達は山と言っていた。何れも紅葉山砂丘列の瘤である。二番目に高い佐々木の山十七メートルは朝日が岡（石井正造小校長命名）と言って冬になると青年団員の協力でジャンプ台も出来てスキーを楽しむことが出来る想いの山だった。

だが今は高度成長期に建築用の砂として運び出され岡でなく平地の畑に様子が一変してしまった。

何故旧村と呼んだか

アイヌの集落をコタンと言う。

本文オヤウのところでも述べたがチセが四・五軒あったから当然アイヌはコタンと呼んでいたと思う（一軒でもコタンを言う）。

だが何故か旧村と呼んでいた。

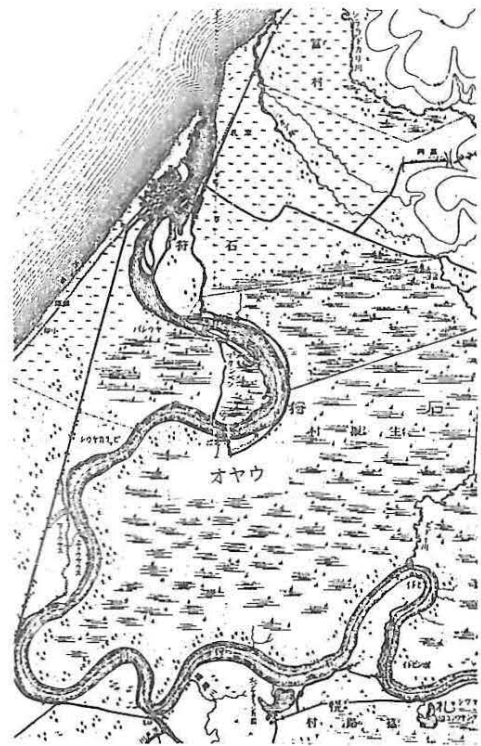
その理由を二、三考えてみると、生振に定住する和人が入植したのは明治四年宮城県、山形県の混成移民団二十九戸、百二十四人を以って草分けとする。この団体の引率者は玉木琢蔵と言い旧米沢藩士族である。入植地はコタンから東側に一戸二町歩の貸与を受け開墾を始めた。

これは区画割（一区画一万五千坪五町歩）が出来ると二十年以上も前のことである。入植者が昼尚暗い人跡未踏の原始林を見た時一番に考えたことは淋しさと恐ろしさから人の住んでいるところそして川に近いところで洪水のないところ（道がないので川が唯一の交通路となる。外にも日常用水にも使う）。

結局コタンの隣りと云うことになったのではないか、だが元武士、和人としてアイヌの言葉はいやだ、考えた末、旧土人の旧を取って旧村と、それに古いと云う意味をも含ませて、面子を立てたのではないかと思う。

古地図に乗った道路

明治二十九年陸地測量部測量の区画割もない川と原野の記号だけの古い地図に道路の印がついている。それは前にも触れたオヤウから来札までの道路である。従って明治の始めころいやそれ以前かも知れない、オヤウから石狩川に沿って川下に歩く、途中ロッコ（六戸）墓地（石狩川の崩落によって今はほとんどない）矢臼場、神社の印のところから



若生小学校の横を通り厚田街道を来札まで、これはオヤウのアイヌが使った生活道路と思われる。生振における、けもの道以外の道路として初めてのものである。この後の測量図にはこの印はない。

終わりに

言語学の研究者でもないスプの素人が参考書だけを頼りにアイヌ語地名の解析に挑戦する等無謀なことだが、素人なりの発想でいろいろ考えることが出来たし、楽しみながらそれぞれの本を読むことが出来た。

あたっているかどうかは別として私なりに疑問を解くことが出来た。

ただ残念ながら私が選んだ後藤の山の附近から遺物が出ていないことだ、遺物が出ていたら、と。

尚、田中実氏、高瀬たみさんから数度に亘って電話やお便りで激励を受け、随分と励みになりました厚くお礼申しあげます

養蜂

金子 仲久

若い頃作者の名前は忘れたが「乳と蜜の流れる郷」という農村文字の作品を読んだ事がある。六十数年も昔の事であるので内容もおぼろげである。題材の示す通り農村の自然の豊かさをテーマにしたものであった様に思う。

私の結婚した頃養父がこの養蜂に取組んでおり、私もよく手伝いをしたものである。と云っても養蜂専業ではなく、趣味と実益を兼ねた農業片手間の仕事である。

本州より移住して開拓に明け暮れの毎日粗衣粗食と茅屋の生活をしながら激しい労働を続けて来た農村に酪農が取り入れられて経済の助長を図り、また乳幼児の発育が助けられ、又甘味食品の極端に少なかった時代の蜂蜜は経済を助ける丈でなく貴重な栄養源でもある。しかし、その当時、蜜蜂を飼っている人は石狩町内にはいなかった様に思う。金子家で養蜂を始めたのは判然としないうが、明治の末が大正の初め頃でないかと思う。

蜜蜂は山野に咲き乱れる花から営々たる勤労により貴重な蜜と臘(ろう)を生産してくれる。花から花へ移動する事により体につけた花粉の媒介によって作物の実を結ぶ大事な役目を果たす事はよく知られている事であるが、早春の蜂の繁殖用に、また夏の育仔に此の花粉は非常に価値の高いものである。では花から集めた蜂はどの様にして貯蔵するのだろうか。

北海道の様な寒い地方では五月から八月末にかけて本格的流蜜期であり十月初旬までに大体終わりととなる。本州南西部では三月から五月末にかけて春の主要流蜜期であり、六月に入ると梅雨期となり毎日雨が続き七、八月は酷暑のため蜂は余り活動しないと云われている。

北海道はその点、湿度も少なく真夏でも酷暑に耐えられないという日が少ないので蜜蜂の活動は活発である。蜜蜂としては、レング、クローバー、ナタネ、アカシヤ等の蜜が高級の部類に入りあらゆる植物の花が蜜源となる。

蜜蜂は自然繁殖もしているが、養蜂家は専用巣箱や巣脾を設備して蜂の働き易い様にする。巣箱は縦四十七センチメートル、横三十七センチメートル、高さ二十五センチメートル位の木製で底板はないので巣箱の台となる為と同じ位の中で巣箱の前面十センチメートル位突出する様に、また台の三方上部に三センチメートル位の棧を打付け前部を蜂の出入し易い様にする。

蜂には一群中に女王蜂、働蜂、雄蜂が居て二万匹位の群が最も優秀といわれる。

普通、働蜂が外に出て花蜜を運び、働蜂の一部は巣箱内を掃除したり、また王蜂が生みつけた蜂仔、働蜂となる蛆の育成に専念する。外から花蜜を運んで来た巣箱内の若い働蜂の胃の中に送り込まれる。しばらくして胃の中の蜜を隣の蜂に渡す。これを繰返す事によって花蜜から水分が蒸発し成分も変化する。こうして蜜は巣房内に貯蔵される。また働蜂が盛んに羽根を振動させている

のは蜜に含まれている余計な水分を発散させるための動作で濃厚な蜜とするためである。蜜房に貯蜜が完了すると蜜臘(ろう)で次つきと蓋をする。

蜂群が強盛であれば二段三段の継箱を重ねるとこれにも貯蜜する。王蜜は働蜂や雄蜂よりも体が大きく体長も長く黄褐色をしている。専ら産卵するのが役目であるから王蜂の体格は幅広く、厚く腹部が膨大し尾端は次第に尖るのがよいとされている。流蜜期には一日千―二千の卵を産む。蜂群が次第に蕃殖して充実して来ると、多数の新蜂が出房し、多い時は毎日二千匹もの蜂が生れる。生れた直後の若蜂はまだ拡がる事が出来ないのでせまい巢面に蜜集している。この様に毎日次から次へと出房し、また貯蜜が殖え、巢面は蜂仔と貯蜜に占領され王蜂の産卵場所も不足して来て自分の産卵力を満足させる事が出来ないし、また働蜂は蜜を集めても貯える場所がないので行き詰まりを感じ分蜂熱を生じ、多数の王台が造られる。この自然王台を利用して新王を養成する。

王蜂となる卵は王台に生みつけてから三日位で蛆となり一週間位琥珀色の王乳を働蜂によって王房内に充分与えてから蓋をする。王乳によって育った王蛆は立派な女王蜂となって、蓋をしてから七、八日位で出房する。出房して一週間位の間に体調も整い発情する。

新王が出房する二、三日前に分蜂が起きるものであるが、分蜂が近付いたら母王(ぼおう)を王籠に入れ隔離するか、または蜂枠二、三枚と共に他の箱に移す。そして新王が生れたら、これ

も蜂枠二、三枚と一緒に他の箱に移す。この様にして新王と蜂を分離して交尾群を造り、天気よい日に新王(しんおう)と雄蜂(ゆうほう)と空中で交尾し新王は(新しい女王蜂)自分の巢箱に戻る。

ところで王蜂は卵から蛆となり成長した王蜂となって発情するまで前記の如く二十二、三日であるが雄蜂は卵から蛆となり成蜂となつて出蜂するまで二十四、五日位、更に発情するまで二週間合計三十八日位の日数が掛かるので新王と交尾させるには逆算して雄蜂を育てる事が必要となる。

さて、女王蜂と雄蜂が蜜月旅行で交尾を終え自分の巢箱に戻った王蜂は、働蜂によって整えられた巢房に交尾二、三日後には体格も大きくなり挙動も落付いて来て産卵を開始する。この様に花の蜜を運ぶのも蜂仔を育てるのも新王を育てるのも総べて働蜂によるもので、これに反して雄蜂の役目は蜜を集める事もせず交尾するだけで交尾を終えた雄蜂は生殖器を女王蜂につけたままになる事があり、雄蜂の生涯はこれで終る。交尾を終えて帰巢した女王蜂に白いものがついているが、これは雄蜂の生殖器で間もなく働蜂によって取除かれる。一方、巢内に居る他の雄蜂は蜜を集めないで貯蜜を食べるのみの無能な蜂なので、働蜂によって淘汰される。働かざるものは食うべからずは、蜂群の中で立派に実践されている。

交尾のために空中に出た王蜂は往々にして小鳥や他の害敵に捉われる事があり、また他の巢箱に間違えて入り殺される事がある

のでこの前後は特に注意する事が必要で、この様な事があつた場合、直ちに成熟王か処女王を与えなければならぬ。王蜂の出房後十日すぎ位に巣箱を検査し、産卵があるかどうか検査し卵があれば王蜂の交尾は成功したのである。王蜂が二十日以上たつても産卵しなければ王蜂に故障がある事が多いので、この王蜂は可愛相だが廃棄処分にし別の王蜂に変える。働蜂と雄蜂の見分け方は巣房に正常に蓋されたのが働蜂の蛆であり、雄蜂の房は蓋された部分が高く盛り上がった様に見えるので見分ける事が出来る。流蜜期には注意しないと思ひ掛けないうちに分蜂して逃がし大騒ぎする事がある。分蜂とは人間社会でいう分家する事と同じ意味である。

分蜂した群は王蜂が近くの樹の枝に止まればこれを中心にして群が団子状に固まり、二、三時間静かにしている。そして偵察に出かけた働蜂が巣にふさわしい場所を見つけるのを待つ。その時運よく分蜂群を見付ければ巣箱を用意し、夕モの様なもので上手にすくい王蜂が居ればそのまま巣箱に移し静かにしておく。落ちてく。分蜂群が木の枝等に止まりまだ充分固まらない中に捕えようと騒いだりすると、蜜蜂は驚いて高い木の枝に移つたり他の方へ逃げてしまうので充分落ちてから收容する。

採蜜するには貯蜜された巣脾房の蓋を採蜜刀で切り開き、鉄板で造つた直径五十一センチメートルの円筒形の分離器の中に設けられた枠籠の中に入れ分離器の把手を静かに廻し遠心力を利用して蜜を分離する。分離された蜂蜜は分離器の流蜜口に取付け

られた蜜漉器によつて漉過され用意した容器に流れ込む様になっている。蜂によつて純粹に精製されているので、カビたり傷んだりする事はない。

花季の短い北海道では九月のソバ蜜や萩の花等が最後に他に花蜜もあるが、気温が下がると蜂も体力を消耗するので活動も鈍くなり、越冬の準備に取りかかる。ソバ蜜の色は黒っぽく一寸くせのある臭いがする。越冬用の給餌には向かないので良質の蜜を与え越冬に備える。

私の所では越冬させるために半地下式の穴室を造り、屋根をかけてその中で越冬させる。その時季は蜂群が育仔を止めて脱糞し充分静かになつてから行う。余り早すぎると騒いで熱を発し、また育仔を始めて失敗する。越冬用には出来るだけ若蜂を用意する。老蜂は長い冬に耐える事は難しく死亡率が高く全滅する事がある。春近くなつて風のない暖かい日を選んで余り動揺させないように巣箱の戸を開けて空中脱糞させる。この様にして間近に訪れる春を待つ。

先に述べた様に越冬させる蜂は優良な若い多産の王蜂によつて産卵され、それが成長した若い蜂群が優勢である事が望ましい。蜂量が多ければそれだけ育仔力も大きいのでこれを越冬させるのである。

札幌市北二十四条に当時養蜂家で組織する北海道養蜂組合があり、蜂蜜の共同販売、養蜂器具の共同購入、移動養蜂、流蜜源、その他養蜂に関する情報交換等を行つており、養父も加入してい

た記憶がある。当時の石狩町では養蜂に関係していた人は余り居なかつた様で、花畔北十線の南出喜久二氏が養蜂を手掛け、後に手稲町に移転して専門にやっていた位である。私の近くで農業を営みメロンやさや豌豆、その他の野菜を作つて居る北十線の其田道雄氏のハウス周辺に毎年移動蜂の巣箱を置いてあるのを見かける。

農家では今問題になっている農作物の消毒や害虫駆除に農薬を使用するので、蜜蜂に取つては決して快通な住みよいものではない様である。最近では農薬の使用を押さえる方向に向いつつある様だ。また忘れてならないのは食料室の完成である。これは流蜜期に貯えられ臘蓋された蜂蜜棗約十枚が満たされた継箱の事で、これを確保して置いて後に採蜜する事である。これは次の年には、何倍もの收穫となり戻つて来る。流蜜期に貯蜜を全部採蜜してしまい、若し越冬まで充分な貯蜜が得られない場合、また流蜜期であつても悪い天候が続いて蜂が働く事が出来ない場合、この蜂群はたちまち飢え死にしなければならぬ。たとえ手持ちの蜜、または砂糖を給餌するとしても繁殖でもあり、手間が掛り蜂も貯蔵するのに労力を費やし寿命を縮め安泰という訳にはゆかず、失敗する事が往々にある。蜜蜂については荒々しい扱いをしない事で静かに扱う事によつて余り刺す事はない。初めのうち、蜂は人を刺すという先入観があるため、馴れない中は刺される事を恐れる余り、ブンブン顔のまわりを飛んだり、手や体に止まつたりした時手で払つたり、打つたりすると反つて蜂を怒らせ刺されるもの

で、この際、黙つて放つておけば飛び去るものである。

平素の扱いがよくないと蜂の性質が荒くなり人を刺し易くなる。作業中は、顔面を保護するため蚊帳の廃物または寒冷紗等を利用して手製のものでもよい。面布を造つて使用する事である。

私の経験では雨上がりの蒸しむした時等は、気が荒い様に思う。また黒い布等着用した時、刺す率が高い様に思う。蜂に刺された時、そこに刺針と毒のうが残り、そのままにして置くと針は益々深くささり、毒液も注射されるので直ぐ取除く事である。そして刺された所はたちまち腫れ上がる。蜜蜂の針にはその下端に鈎があつて一度人を刺すと抜く事が出来ない。蜂はこの傷のため生命を失ひ死ぬ。即ち人を刺す時は、自分の命と引き換えに刺すもので好んで刺すものでない。その人の体質にもよるが、刺される事が度重なりと免毒性となり蜂の毒に負ける事も少なくなる。但し、これは蜜蜂に関しての事であつて他の熊蜂やすずめ蜂等は、時に命取りになる事もあるのでくれぐれも注意する事である。

私の父は老年期になつて時々神経痛に悩まされる事があり、その時には、わざわざ蜂に刺させて痛みを和らげていた様で神経痛に効果があると見える。

いしかり曆

第十二号

平成十二年三月二十五日 印刷

平成十一年三月三十一日 発行

発行者 石狩市郷土研究会